

十月 十日 空襲。軽傷者数名、建物焼失八棟。

十月二十日 上原信雄、愛樂園勤務。

昭和二十年一月 一日 空襲。

二月二二日 空襲。

三月 一日 空襲。犠牲者一名。

三月 十日 空襲。職員事務本館と倉庫焼失。

三月二三日 この日から連日空襲。

四月 五日 ニミツツ布告で米海軍軍政府設置。南西諸島、日本より行政分離。

四月 中旬 八〇〇キロの大型爆弾、入園者地帯に多数投下。早田園長、遂に入園者の自由行動を許可。

四月二三日 米軍、運天港より上陸。米兵愛樂園に進入。らい療養所と分り職員、入園者疊より出る。

六月 泉正重愛樂園事務長、米軍の命により屋我地島長に就任。

六月二三日 日本軍の組織的抵抗終る。

八月十五日 日本、無条件降伏。

九月十三日 占領軍の公布した地方行政緊急措置要項により、入園者にも公民権与えられる。

十月 泉正重事務長退職、屋我地島長に就任。

十月 多田武一愛樂園事務長に就任。

※ 沖縄愛樂園「開園30周年記念誌」（一九六八年）より作成。

（村上仁賢）

## 愛樂園

### 戦争の中の愛樂園

教員 宮城 兼尚（三一歳）  
自治会役員 新垣 正治（三六歳）

宮城 戰争前のわれわれ入園者の苦労と戦争にどういふうに駆り出されたかといふことから話しましようね。これは、まず第一に日戸収容といふのがあるんです。これは軍の収容なんです。日戸といふ軍医の名をとつて日戸収容といつてゐるんです。

新垣 日戸といふ人もいるし、日東といふ人もいるしね。どっちが正しいかな。

宮城 この方が、まず愛樂園のほうが今度の戦争で戦場になると、そのために沖縄のほうに日本軍が進駐すると。そのためはどうしても在野の患者を一か所に集めなくちゃいけないと、いうことで、まず愛樂園においてはそのとき四百五十名くらいだったかな、最初の定員が一。

新垣 そのくらいだね。

宮城 その中に九百名ぐらい収容しようという計画がなされたわけですよ。四百五十名にさらく四百五十名いれようと、その態勢を整えよといふ至上命令がですね、園長のほうに来ただけなんですね。園長先生は早田といふ第二代の園長ですけれども。そのため園長としても戦争も入園者としてもですね、病者であつても戦争には協力し

ようじゃないかといふうことからですね。まず第一に戦争に協力する段階としてですね、園長が入園者に、自分がここにやって来たということは、愛樂園が戦場になつた場合に、それをどう切り抜けていくかといふ園長の責任を負わされているから、協力してくれということなんですね。それで協力するためには園長になつて来たわけですよ。それでそのときですね、入園者の長老格という青木（鹿哉）先生ですね。それから中原幸吉といふて元伊江島の村長をなされておつた方、それから根路銘一なんといふたかな。

新垣 ああ、なんといふたかな。

宮城 根路銘さんと云ふてですね、青島だつたかな、領事館の館員を、書記官かなかしておられた。

宮城 立派な人格の方だったんですよ。まずこの方々を呼んですね、沖縄はこういう現状であるんだから、ひとつ協力してくれと、いうことをやつたんですよ。ところが青木先生はその当時、宗教（キリスト教）の立場から、それから中原幸吉先生といふ村長があつて、年とつてしまつて、根路銘さんという方は眼が不自由ですね、到底そのようなことは自分として協力できるかどうかという、あれがあつたんでしょう。それで辞退したんだつたかな。

新垣 そうでしょうねえ。

宮城 辞退したとかいいましたね。それで園長が次に挙げるのは高嶺といふ方で、この方は非常に血の多い方だったから、やろうと、引き受けようといふことで、引き受けることを申し出たわけですよ。で、高嶺さんはどういふうにするかと。それで賛美会とい

う自治会をですね、入園者で結成したわけですね。

その自治会というのが、まず人事部、教育部、作業部、食糧部といふ四つの部門だけをこちらにまかしてくれたんですよ。その四つの部門をつくって、いろいろと各部長やら、役員を入れ園者から選んで、自治会を組織したわけですよ。ところがその自治会というのは、あくまでも、園長の命令を守って、入園者を治めるということですよ。これは自治会とはいわれないわけですよ。自治会というのはずから立ちあがって治めるのですから。

新垣 わたしはその頃これを半自治といっていました。

宮城 さて、自治会を組織したら、まず人事の問題なんですよ。人事部といふのは入園受け入れの態勢ですよね。それをみんなで準備しなくちゃいけないと、それから食糧部を自分の手中におさめるということですね。人事部は入園者の規制であるとか配置であるとか秩序維持であるとか、そのほか人事関係があるんですけれども、その日戸収容でさら

に四百五十名収容するということであるから、まず部屋のつくりかたですね。食堂一もとは一棟（一母棟）のほうですね、四室がありて、その十三畳くらいの中に八名の人がいりてあつたんですよ。それから中央に食堂があつて、その食堂を部屋につくりかえると。それから居間の押入れなんかはですね、八名分だけしか入らないけれども、そこにさらに倍の十何名か入れなくちゃならないから、そのためには部屋をつくりかえなくちゃいけまいということ。それから一番困ったのはですね、布団だったよね。このときに布団は四百五十名分しかないでしょう。それを回収させて、作業部のほうに命令

して、これをうすすべらにするわけですよ。そういうことですね、

まず布団の用意。

新垣 大変だつたなあ。

宮城 支給品がですね、今まであつたチリ紙やら、石けん類もこれも半分になるわけですよ。さらに食事。あの当時麦がいくらというふうに。これは前の時代では、昼食は必ず代用食ということになつていてですね、譜、ソーメンだったか、米以外のものであります。そのように食糧品の節約をしておつたのに、この先生が来てから、四百五十名で食べておつた食糧を九百名で食べるんだから一食半食というておつたね。

新垣 そう、最初は、ぼくら来た頃までは、二食あつたんだが、それが一食になり、さらに半食になつたんだね。

宮城 お椀の盛りの半分ですよ。一杯の半分、これ半食というんです。一杯になつたのは食糧事情が悪くなつたからですが。

新垣 早田先生がいらしてすぐたつた。

宮城 その半食でまあ食糧を使えということ、それで入園者はひもじいですからね。元気な人は草取つてきて雑炊を食べるとか、譜を煮たりできるんですが、不自由な人とか年寄りとか子どもでもあるとかはそれができないわけですよ。しかしそれであつても戦争のためにわれわれはやらないじゃないと、まず食糧、支給品、住宅、布団が切りつめられるということになつてですね、それでもわれわれは戦争に勝つまではと、いうことでやつたんですよ。それからさらに、北九州が爆撃されて、こつちもみんな堀掘りがはじまつたわけですよ。最初は庭の前に掩蔽壕といって待避壕をつくつてい

たですよ。ところがそれじゃだめだ、どうしても頑丈なのを作らなくちゃいけないということで、今そこにある防空壕ですね、丘のところにある、それを作れという命令がよ、これ入園者にやれとう。

新垣 おそらく軍の方からきただらうと思います。

宮城 そして園から自治会の方にきた。自治会はこれをどうしてつくるかと、ところがそれがですね、大変な労働ですよ。御飯を半食たべて、それに掘るもののが鍬とか、つるはしはあつたかなあ。

新垣 つるはしはあつた。

宮城 そのくらいのものですよ。残りの連中は砂をリレー式で持ち運ぶので。それを動員するのに、入園者はひもじい、ブツブツいうんですよ。仕方がないから、園長はそれを駆り出す道具として、譜半斤だったか、おカユだったか。

新垣 最初はおカユね。

宮城 最初はおカユを支給して、それを働く人に食べさせよつたですよ。で、働きえない者は食べさせなかつたですよ。

新垣 園長はつきりね、働かざる者は食うべからずと、はつきりおつしゃつたね。

宮城 だからおカユに誘われて、みんなが作業に出たんですよ。

新垣 一杯のおカユ欲しさに、不自由な人たちもみんな出ました。

出なければならなくなつたんですね。

宮城 そして、戦争の態勢が、園長から自治会にきて、自治会は入園者のほうに命令して、そのために元気な人はちょっとした畑をつくて蕃や野菜をつくり、弱い人たち半食で我慢しなくちゃなら

んというわけです。それでもあのおカユ欲しさに傷をつくり、手にこうちして、身のなくなるまで。わたしもこうして手足がないのはそのときの過労によるのです。この新垣さんもある当時の過労と栄養失調という悪条件のもとですね、本病といふものは何でもないんですけども、その当時の肉体的・精神的なものでこうして眼がみえなくなり、わたしのように手足がもぎとられるという状態に追い込まれたのはその時の過労によるものですよ。

新垣 園長先生がいらしたのは昭和十八年の二月だったか三月だったかなあ、そして十九年には、みんなが一生懸命になつて壕を掘り出しがた。

宮城 壕を掘った当時、人員の編成替えをしたんですよ。いわば働く者と働くしない者の区別をしたんです。わたしたち学園があつたんですけど、学園も不自由な方々を入れてしまつてですね、子ども連れをひとつ寮の中に入れて教室兼宿舎ということになつてしまつたんです。そこでわたしたちはおカユもらうために堀掘りをやる。わたしの立場は学園の先生していますから、子ども三十名みていれる。この子たちを食べさせなくちゃ、ならないでしよう。で、子どもたちを動員して壕掘りの手伝いをさせるんですよ。そしたらおカユがもらえると。

新垣 子どもたちも草刈りをしたりしないと、食べさせてもらえないんです。

宮城 だからわたしは、手足がこうしているても子どもたちを連れて食べさせなくちゃいけない。そういうことで、戦争準備を、弱い人たちが動員されて、手足がもぎとられてる人も眼が不自由にな

つてゐる人も、やらなくちゃいけないということになつたんですよ。

戦争態勢を整えること、弱い人、働ける人、年寄りなどの編成替え

をした。学校もそうです。青年団も結成して、青年寮をこしらえた

んです。その中にわたしも、新疆さんも入つて、そのときこの方は

自治会の教育部長をしていましたから。

新疆 あの頃は三十五くらいでしたか。

宮城 教育部長で、わたしは学校ですから、いわば上司になるわけ

ですよ。わたしは、青年寮ができたときに、わたしは班長で青年た

ちを訓練するわけですが、わたしは指導主任として、この方たち

は統監部にて翼賛会のほうに勤務しますからね。わたしは子ども

たちと青年を受けもつんですよ。だから、そのときの教育というの

が日本精神を吹き込むことですよ。日本歴史を教える、それからい

ろんな精神訓話をして鼓舞するということ、それから働く、すな

わち弱い人が出来ない壕を、青年団の力で掘らす。不自由者の人た

ちは掘れませんからね。不自由者や病棟の人たちが避難する壕です

ね、青年団の人たちがやらなくちゃならん。で、わたしはそれを引

率して青年団で病棟壕を掘つてあげるんです。一般の人たちは、わ

れがちに自分たちの壕をつくっているんですから。少年や青年たち

が掘った壕があそこにいまもあります。あの事務所のうしろの方の

壕の中にですね、看板が立ててあるんです。この壕は少年や青年た

ちが病棟一。

新疆 そうそう。

宮城 そうした壕をつくつて、それは自分の身を守るということも

そうですけれども。

宮城 こつちはみんな、いわば徒食のほうだから、こちらへ集めて皆殺しにするだらうという考え方だと、これは支那事變で蔣介石がやつたということをみんな知つておるからね。

新疆 ええ。

宮城 ああ、われわれもそうだらうという覚悟で、死といふものは恐れなかつたですよ。わたしたちは、精神訓話の中にもとりいれて教えこむんです。それが自分の身にかかつたのは十・十空襲がきたときです。そのときは、ちょうど朝礼といって日の丸の掲揚、そのときは職員と入園者だったんですけども、入園者の方は雑多になつて統制とれんですが、結局青年寮と学園ですね、毎日国旗掲揚、ラジオ体操一。

新疆 宮城遙拝も。

宮城 宮城遙拝して、國旗掲揚して、それから御歌というのを歌うんですよ。それからラジオ体操でもして朝食につくという時間割が決まっておりました。その朝礼を終えたときだつたんです。空襲警報がかかつて、この上のほうからたくさんの飛行機がくるんですよ。ところが戦争じゃないと思うもんだから、おーたくさんの方々がきたといふんで、みんな手を叩いて喜んでるんですよ。それから旋回しはじめて、対岸の運天港のところに爆撃がはじまつた。高射砲がなつた。それでもまだ演習だと思つてゐるんですよ。入園者のほうでは。それからまあ空襲だからみんな壕の中に入つたんです。壕はそのとき、六、七分通りのできあがりでした。そこへみんな統制で避難したですよ。わたしは例の如く子どもたち三十名を非常袋かつがして指定の壕の中に入らせたんです。で、こうしてヒョ

新疆 みんなね、あとはみんな、不平不満でしたよ。そんなことまでする必要あるかというようなく持たつたですよ、最初は。

宮城 反対した人もありますよ。

新疆 落盤したらどうするかとかー。

宮城 そのようにして壕ができました。それから、話をもどして、日戸収容のときの話をしましよう。日戸収容がきた時にはですね、日本の軍が沖縄の方に進駐してきた、それで民宿にするから在野の患者たちはみんな収容すると。その収容がですね、非常にひどかったんですよ。抜刀して、野良にいる人をそのまま連れてくる。そして軍刀ももつておどして、着のみきのままでありますよ。野良にいつてるのは野良着のまま、何も持たさないです。あっちに行けば布団もある。衣類も何もかもあるというふうにして、御飯も充分あるといふんです。ながら、さつき話しましたように、布団は一人の半分、支給品もそ

うする、食べ物は半食、そんな強制収容してきて四百五十名というものをワーッと入れたんですよ。人権ってないですよ。半分の人が權もない。

新疆 全然ありませんね。

宮城 だからムシロ一枚に二人寝るということですよ。荷物は廊下におけと。蚊帳も何もないんだから、そのまま寝る。だからわれわれはそこに集められて、爆弾落されて、皆殺しされるということをみんな予想していたんじゃないかな。

新疆 少くとも十・十空襲がはじまるまではね、まさか沖縄にくるとは考えてなかつたです。ところが十・十空襲がはじまって以後はもう、みんな死ぬ覚悟でした。

新疆 フクリそのマークをみたら、これが友軍のマークじゃないんですね。米軍のものだ、敵機だということでみんな壕の中に入ろうとしたんだけど、若い青年の連中たちは、いや迎天港の演習だといって、あそこへいつてるんですよ、見にー。

宮城 敵機が上空に来るまで空襲警報も何もでないんですよ。

宮城 こつちは演習だといって、あすこの沖につないのである大きな船の中に爆弾投下するのを怪んで見て、丘に上つてるのは手を打つて見てるんですよ。ところが、それが一転して、このほうに射撃して来たんですよ。それからは、大変だと言つて防空壕に入り勝負です。わたしたちは、子どもたちのほうだから平然と入れていたんですが、爆風よけはないわけです。わたしは常に子どもたちに、先生の指示に従うようにと、もし米軍が上陸してきたときには、あなたがた殺すだけの毒酸カリは持つてゐるから、心配するなど。先生の命令に従いなさいということで、わたしは中腰になつて壕の前に立つて、爆弾が落ちるのをみて目の前百メートル位のところですか落ちたんですよ。「バクダントウカ」というと同時に爆弾ボーンとやつたんですよ。それと同時にわたしは壕の中にはうり投げられたんです。そしてこわくなつて、それからはもー。そして上空から爆弾投下するときに、ギー<sup>ト</sup>と気持ち悪いですね。そのため、こここの施設のおもなところ、病棟、公会堂、中央共炊（共同炊事場の略称）、それから女棟七、八棟くらい。職員寮も一、三棟やられたといったな。

新疆 そうそう。

宮城 そして青年たち五、六名くらい、逃げ遅れた連中が、風や、

砂なんかでケガ人が五名出たんです。ところが共炊はみんなやられましたよ。たたきつぶされ、御飯が炊いてあったよ。昼御飯ですね。それが、みんなガラスの割れたものや砂がまじっていたり、それを配給してですよ、ガリガリしながら食べて。それでも食べないと大事ですから。

その時は一日、空襲で追われました。終って帰つてみたら焼けてるところ、残つてゐるところもある。それからこの九百名という人たちは、また再収容する。こわくなつてにげた連中もおりました。彼らは、まだ再収容する。とくくなつてにげた連中もおりました。

脱走して故郷に逃げた人もおつたんです。十・十空襲はそんなことでしたが、食糧はもうないもんだから、結局そのときに一番助かったのは、松田先生が牛を買って来つてこれやつたんです。これが御馳走だつたんですよ。話が少し前に戻りますが、自治会の方では食糧困難がくるということを知つたもんですから、食糧挺身隊というのを結成しました。これは入園者の中で比較的壮健ながたで結成したんですよ。

この方々が丘や山、庭のちょっとした空地を全部開墾してそこに

みなカズラ（藪）を植えたんです。

新垣 この森の上も全部畠でした。

宮城 そこの丘は桑畠だったのを全部倒して藪を植えたんです。そ

の藪がちょうどどのる時分だったな。それで、食糧のないときに元気な人たちはその藪を掘つて食うんですよ。それでは大変だということで、統監部の方で、その頃から協賛会を戦争態勢で統監部とうことにしたんですよ。その統監部のかたが、カズラ少し取つてもすぐつかまえて、小さな藪とつて来てもすぐわかるという嚴重な監

視がきたんです。この挺身隊に入つて働いた人は、うねを一間ぐらいいもらいました。

ところが、わたしや子どもたちは働かないでしよう。ないんですね。仕方がないから、わたしは学園突撃隊というのをこしらえています。何するかというと、藪のこやし、例えれば海岸に寄つてくる藻を拾う。朝晩草刈りをして推肥にして、増産の加勢するということです。ようやく藪が少しずつもらえるようになつたんです。

それから、教科書の話ををしておきましたよ。教科書がないんですよ。で、早田先生に、先生を通じて教科書を買おうといつたら、今時分そんなものあるか、先生は自分で作れと、ということで、子どもでも働くかす他ないということで教育はできないんですよ。それで朝晩は草刈作業、屋のときに食堂へつれて古い教科書を、那覇の甲辰学校から、使い古したものを寄贈してもらつて、それを使って教育しておつたんです。だから働くかす、そして教育するということで、わたしたちは教育の道からはれなかつたんですけども、この戦争がいつまで続くか判らないもんですからー。

まあ十・十空襲のあとは、間けつ的にやつてきて、B 24が旋回して爆弾おとして逃げていくとか、そんなことでしたが、いよいよ本格的になつたのは翌年の三月だな。

新垣 三月のね、二十三日から。

宮城 三月の二十三日から本格的な空襲やつてきたんですよ。それで残つたうちを全部やられちゃつたんです。わたしらちはみんな壕の中に避難、寝はしそつちゅう旋回でしちゃう。

新垣 三月二十三日から四月二十三日まで一ヶ月間壕生活です。

宮城 壕生活は、屋中はそこにじつとしているんです。夜はでていつて食事炊くわけです。食糧は職員側にあるものを、もう危いからといって、入園者の壕の中に疎開させて、御飯だけ炊くんです。一日に握り飯一個だな。

新垣 うーん、二個ずつ渡つたね。

宮城 ひとつはとつておいて明日の分、ひとつはその晩食べるわけです。

新垣 だから、そのころはむしる握り飯二つだから、そのちょっとと前よりはよくなつたわけです。

宮城 ところが、副食は何もないんですよ。御飯ばっかり。だからその晩で炊くでしよう。そして各人に二個ずつくるんです。だから寝る前に一個食べるんです。あとは明日一日中のもの。だからひもじいからもう一個食べる子もおつたよな。

新垣 ああ、ぼくらもう待てないからねー。

宮城 それでおかげもないで、一ヶ月生活です。そしてまだ壕掘らないところがありますから、夜間はでつて壕掘りです。わたし

たちは子どもたちで貫通壕掘らすといって、着物や道具を疎開させ

といつて、夜は壕掘り、食事づくり、洗濯をする。屋中はもぐら生

活です。それでシメジメした中でしおう。私事にわたりますが、わ

たしは足も手もその頃は大丈夫です。で、子どもたちを連れて避難

するときに、子どもの非常袋を寮に残しているのがあるというの

で、これをかついで逃げるときに、蟹の穴に足をつつこんで捻挫し

たんです。それが壕の中で、医者はいないし、いてもそんな治療はできないわけです。だからわたしは、この手は敗血症になるし、足

の方も敗血症になつて、それで自分は死ぬもんだと思って壕の中でもじつとしておつたわけです。そうしているうちに子どもたちが、ひもじいもんですから、炊事場にいつて、おこげをもらつてくるんですよ。それで壕の入口にわたしが寝ている枕もとを越えるとき、このおこげを落としたんです。これどうしたのか。炊事のおじさんからもらつてきました。こういうものは一人だけじゃなくて、友だちみんなひもじいんだから、みんな食べさせなさいということを話したら、はいといつて、そのおこげをもらうのにみな整列してゐるんですよ。

わたしは助からんものと思っていたんだけれども、みんな友だちのお蔭で生き延びたようなことです。ところが、その壕の中で死んでいくと、火葬もできないでしよう。そのとき、この新垣さんは教育部のほかに葬式係ですよ。ひどいことになると、もつこに入れていますが、大島和光園にいかれた杉田先生、ちょうどぼくが二、三人で屍体を運ぶときですね、この先生にぶつかつたんですね。先生おつしやるには、新垣さん、そりやあんまりひどいじやないですかと、いわれたのをまだはつきり覚えてます。でもどうにもしようがなかつたんです。それ以外にー。

宮城 二十体余りあそこに埋めてですね。

**新疆** 二十年に入つてからはですね、一日に二、三人。それから壊生活三月二十三日からあとは四、五人。一番多いのが七人ですよ。

宮城 これを教育部の方々がみな処理するんですよ。友だちみんな

な蟻の中にいて隠れているんですねから、死んだといったら教育部がいって、死人を処理するんですよ。これこそ大変な仕事で、夜なんかですね、昼は自由にでられませんから、夜いく。こうしてやってからわいたしたちが非常に苦労したのは、蟻からでてからです。それまでは食糧がだせたんですが、蟻からでてからわいたしたち

は食糧がなくなつたんですよ。食いつぶしてしまつて。子どもたちをもう分散させようと、他の人を頼るより仕方がないと。ところが引き取り手がないんです。こっち親がおつてもですね、ああもう先生がたと一緒にから一緒にさせとけといつてですね、かえつて預けるんですよね。しようがなからわだしたちとしてはですね、もう分散して先生たち三名で、もう何名ずつでもひき受けようや、残る元気な若い連中は青年寮に入れてしまえ、もう歩けない人たちだけにしようと思って、で、わたしは三名か五名かの連中をひきつれてですよ、蟻から出だんですよ。ところが蟻から出たときはもうみんな家をこしらえてなんかしです、自分でいいように雨をしのぐだけの小屋を作つておるけど、子どもたちは作れないですから、一般が蟻から出であとまで、わたしたちは蟻に残つていたんですよ。そうしているうちに、わたしは手が敗血症になつて、もう身が動かない、で、子どもたちをひもじくさせちゃいけないということですね、まずアーサよ、この

それでも耐えてきたんだですよね、わたしなんかに、あの人、きついと言われて、軍法會議にまわされたんですよ。ということは、最初に手を切ったんですよ。腐って臭くてですね。こっちの左手首から切らうじゃないか。いや切らさない。ぼくは足でさえ不自由なのに、これ切つたらどうするか。ダルマにならない、切らさない。そ、うか。じゃ、切らんで。おけ。ということで済んだですがね。次に足の方が捻挫したもんだから、こうしてるんです。

新疆二十年の五角だな

で多いくらいですよ。それが戦後がですね、三十何名か、四十何名かというふうにしてですね、二百名余りの方が亡くなっちゃったんですよ。それがですよ、おもしろいことに、早田園長が、ぼくは救ライに大きな功績を残した、何故かということはライを撲滅させることだから、患者を一人でも多く殺すことは救ライにつながっているんだと。だから自分はその最初の園長、第一代園長はその二か年か三か年の在任中で三、四十名しか殺さなかつたけど、ぼくは任期中に百何名か殺したと。だからこれが戦後、金鶴勲章もんだといってですね、いばるんですね。それを聞いたときに、は、われわれには人権はないのか、ということですよね。

新垣 元談だったんでしようけども、自分たちにはどうも。きつ  
く響いたですね。

宮城 二百名殺したから自分は金鶴煦章だということですから。そういうふうな中においてわたしたちはきたえられてきたけれども、そ

封のアーチャーズズムとかいうモウアーサよ、芝のところにあるものですね、これをとらすんですよ。それからこれを洗って、そしてバケツいっぱいくらいの、それほど水ですかね、それを一食分にするわけですよね。それからまた、雨ふりのあとはよくカタツムリができますよね。これを集めて、その辺にいるカタツムリです、あれがまたおいしいんですね。あのときはもうおいしかったです。それから草はですね、わたしたちは今学校あだから、子どもたちに十字科植物はみんな食べられる、菊科植物は食べられないということですね。それから海にあるハマヒルガオですね、あれのほうでも食べられるといつて食べさせた。それからもとひどいのになるとね、あのペイヤの芯ですね、あれも食べてみた。それから男の連中はソテツ採ってきて実をするとね、かすがでるんですよ。そのかすをまた食べるということですね。だからんときの草が、まあソワブキなんか当然おいしい草の中にはいつているんですよね。あれなんかは。

それからぼくたちは統監部の農業部の食糧係の方からもですね、まあなんとか子どもたちだけでもひもじい思いをさせないようになると、いうことであつたんですけど、それでも自分たちはー。ええ、もうそのときもう海岸ばたにいつたらアメリカの残飯いろいろ流れてきていたんですよ。これをまた探してきて食べせるということをしてー。だからわたしたちは食べることについては、藻や草やら、それから食べられるものは全部やってみたんですよ。一番おいしくなかつたけど、腹満しよつたのは、あの例のソテツのかですよ。あのすつたあとで、あれをまた乾燥させる、デンパンじゃないです。の方が搾搾したものだから、こうしてるんです。

壕から出てじきです。

新疆  
二十年の五月だな。

宮城  
はつきり覚えてるんですがね。で、足をみせたんですよ。そしたら、この男まだ生きてるのかというんですよ。薪があつたら殺してくださいよつたんだがなあ、というのですよ。火葬する薪がないんですよ。薪がないから生かしておくんだが、薪があつたら殺しておくんだった。それで、お前生きておつたのか、というんですよ。まあ、それ冗談だつたんでしょうがね。

だから、そのことが瘤にさわるもんだから、先生、あんた救ライ

園の医者じやないか、人間、そのライを披つている人がそんなひどいことを言うのか。もうひどいことをいうたからですね。だが、わたくしなどは普通なんですよ。たいていの人だつたら、あれですよ、ひもじいか、おいで、ひもじくない薬あげるから、と、そういうことと言つたです。それで爆弾にあたつて怪我したというでしよう。すると、さんざん叱られるんですよ。なんで敵の弾にあたつてからに、日本の薬を使うという國賊がいるかというんですよ。まだもつとありますね。ここは病院だといって赤十字のマークをつけたら爆

弾が落ちないんですよ。で、それ進言したわけですよ。赤い赤十字をたてるといつたらですね、ここに爆弾を集中させておけば、軍人のほうは軽くすむんじやないか、だからあんた方はこれで耐えておけと。

爆弾をたくさん落さしておけば、それで儲けものだと、それだけ軍隊のほうに落ちないからいいんじゃないかと。

新垣 そのことについてはね、あの頃は総務部、自治会の総務ですよ、高嶺さんという方が総務でした。その方に、わたし相談したんですよ。グランドがちょうど、今二階建てがあるでしょう、あれの一番北あたりでしたね、相当大きなグランドがありましたから、そこに何か表示しましょうか、と。そうだな、やろう、と言ふんで一石灰つくってましたね、その石灰でどうにか表示しましょう、といって。することになっていたんですね。ところが当日は、園長先生の祝いか何か知りませんが、やめようと。表示したためにここに爆弾が落ちなくなることはいいことだけでも、しかし戦っている兵隊さんたちに対して済まないじゃないか、やめようといってやめたんですがね。

宮城 だからそれで、もう爆弾が落ちるだけ落とせー。

新垣 ああ、あれは園長からの命令があつたのかな。

宮城 それでそういうことで、ここに集中的にですね、落ちたんでですよ。あんときは大変だったなあ。壕の中に何キロ爆弾だつたか、百キロといいよつたか、大きなやつが落ちて、

新垣 あれ。八百キロ。

宮城 八百キロ。あれが落ちてきてからに。

やさしいし、かわいいもんだといふうなことも放言するんですからね。もう朝鮮人であると、そのくらいだつたらですね、もう集団で刃物を持って殺すと、殺しにくるというんですね、職員の話によると。ところが沖縄の人はね、そのくらいのことで、かわいいもんだといふんです。なめられたというのか、事実の話なんですよ。そんなところでわたしたちはやつてきたんだけれども。

今、考えてみると、この病気は癪つているということでみんな元氣で帰つていくんですが、それを見たときに、わたしたちは戦争中にそうした後遺症ですね、この方なんか目がやられてしまふということで、手足やられてその後遺症で社会復帰できなんですね。だからわたしたちは現在においては、戦争からくる犠牲者だといふんですけど、誰も取りあげてくれないんですね、こういう問題は。わたしたちは社会と一緒に苦労したんだと、また同じように戦争に協力したんだと。壕を掘る、食糧を増産する。また屋根のほうですね、アダンの葉っぱを切つてですね、それを上にのせて、敵の高空からですね、偽装することも、みんなこつちがやるんですよ。だから食糧にしてもですね、こっちのほうが全部確保するということですね、これから新しい闘、新しい療友たちには、ほんとにこころは愛の國であるということをね、建設しようということで、現在も努力しているわけですよ。だからあれがなければ、そういう気持

新垣 繰りやなくて、そのほうに落ちた大きなやつよ、あれ八百キロつて。

宮城 あれが落ちてきてですね、もうそんときは、もう壊滅ですよ、園がね。ほとんどもうないんです。だからそういうふうな園長のもとでできたえられたから、わたしらちはまあ、人間性があるのか、人権があるのかないのかわからんくらいに、虫けらみたいに実は耐えていたんですよ。自分ではね、もう虫けらと同じだと。ひとつには園長に対しても済まないというふうな良心的なあれがあるもんですからね。そういうことに慣れていたんですね。だからそれに対しても、わたしとしては何というか反感というものはなくてですね、もう宿命だろうと、わたしらちに課せられた宿命じゃないかという考え方方に諦観するほかなかつたんですね。しかしあした戦争の中を切り抜けるために、この先生方がそれだけの毒舌でも使わなければ、みんなが奮いたなかつたんじゃないかと、わたしらちは全員思つてですね、まあ解釈しているわけですよ。というのは、壕を造つたために犠牲者が一人もでなかつたこと、あの人半食のおカユをね、餌にして造らしたということ。人園者の全部が身を守るということができたんだし、またあれだけの食糧を確保するために、厳重な監視をさせたと、園長のそうちした命令が徹底してあつたんだから、それでいいじゃないかということで、わたしたち、善意に解釈してですね。まあ先生のあれは一しかし、いわれた人たち個人個人では、殺してしまおうじゃないかというぐらいのところがあつたんですね。ところがこの先生はまた、こんなことを言つてますよ。朝鮮人はすぐ反抗するけどね、沖縄はほんとににはなれないんじやないかと思うんですね。

わたしは特殊な学校教師であったという立場と、その当時戦争のときの指導者であるということ、だつたんですね。ここにいるときより、ここから出たときに死んでいった人たちが、その病棟の中にいる人たちのいうことがですね。死の間際に、看護婦に願うのはですね。カンラバーシューサー(カズラの雑炊)食べてから死にたいと、油味噌食べて死にたいと、必ず死ぬ間際にはですね、食べ物です。もう腹いっぱいあのジュース一ノリ食べていただきたいなという人もおるし、それからまた講を腹いっぱい食べたいとか、あのカンラバーシューサーは一番餓死のあれですよね。あれを食べてから死にたいと、そして、ある人のときは病気が下痢ですね。それからもう腎臓をやられておると、腎臓というものは食べ物が食べられないでしまう。だからこの人たちは水飲んでいけないというのに雨だれの水を飲むんですよ。もっとひどい話を一つやりましょう。これはわたしのともだち、わたしは、あのむこうの校舎が一番不自由舎といつたらこの世の地獄ですよ。わたしは学校の教師をやめてそして松田先生にお願いしたんですよ。人間一番最低の所にわたしは行きましょと。そのとき、わたしは不自由舎に入ったんですよ。不自由舎といつたらこの世の地獄ですよ。ということは不自由舎では不自由な男女がですね、ひとつ部屋に入れてあるんですよ。そのほうには付添というのがついているんですよ。青年の若い方々がですね。で、その人たちがご飯を持つてきたらその人がつぐんですよ。すると男も女も、あれに実が少し多くはいつた、これに少しいれたというふうな感じでみてるんですよ。そして配給できましたから

取つて食べなさいといつたらワーッと入るんですね。そして入つていつてみんなご飯、重いのから取るんですね。そしてあれの中に実がたくさんはいつていると、みんなワーッと入つてくるんですね。そういうところもですね、地獄ですね。そしてほかの人たちは今いうように畑にいって蕃を取るでしょう。不自由な人は食べていけないからですね、ねすんでくるんですよ。だからどうぼうは不自由者だ、ということで人間扱いされないんですよ。人間扱いされない病者の中できら人に人間扱いされないんですよ。その中にいてわたしがつくづく感じたのはですね、わたしの棟に若い青年がいたんですよ。そして蕃を並べるんですよ。そしてみんなケチをつけているんですよ。そうすると、さあきました。取つて下さいといつたらワーッと取るんですね。ところが目の見えない人は隣りの人にとってもらうけれども、若い子はですね、わたしに同情して、先生わたしが取つてあげました。はい、そしてわたしのものを取つてあげてから自分の物をとろうとしたら、一番まずいものですよね。悪い物をとっちゃつたんですよ。そうしたらその子が、ラーサヤあの人たちの物取るといってわたしは悪物があたったきですね。蕃さえもこういうふうな取りあいですよね。そして、籠詰の配給があるというのに対してですね、これは食べたいということですよ、いやこれはダシにしか出来ない食べさせないというんですよ。それから明りがないもんだから、夜がきたら、ねちまうんですよ。わたしはそれを見てですね。少しは不自由舎でも明りが欲しいんじゃないかなと思つてですね、そのころに一番換金になるものが

れでわたしは足を切らし、このうえ足を切らそうとしたが、鎖骨ですね、そこだけ切つて上にあがつていくのをとめたんですよ。そのときにあらう、何とか化膿止めの薬があるでしょう。何とかいう化膿止めのアメリカの薬。

新垣 ああ何といったかな、あの白い大きなやつよ。

宮城 あれがでてですね、化膿止めが出ていたからわたしの足も何とか治つたんですよ。それでもわたしは両足切られて、今こうしてでもですね、生きながらえてきたということは、わたしの周囲には良き友がおつて、良き人たちがおつたために生きながらえてきた。ところがわたしと同じような方々は、もうほとんど死んでしまったんですよ。もう二百何名の中にもはいりよつたんですがね。食糧がないでしよう。栄養失調で死んで、だからわたしはさつきは言い忘れたんだけど、わたしの友だちで、小学校の友だちがひょっこり山からですね、避難してきて病気になつてそここの軍の赤十字におつたんですよ。三十年四十年前の小学校の同級生だからめずらしくて、話したら、これも不自由で、T・Bを患つていたんですよ。(據から)山から避難しながら來ていたんですよ、垣本という人がね。で、入つて来たらね、この人は片足を切断して、といつていたんですよ。そしたらイチャマンヤー(魚をとる家)についてね。この園の中には、魚取る人たちがいるんですよ。あすこは魚と蕃を交換するから、食糧多いですよね、あすこに蕃食べにくんですよ。

新垣 ああ、あのヤイゾウたちがイチャマンヤー。  
宮城 そうそう、魚取つてですね、その魚を売つて。で、この方がいてですね、ウムグワー(細い肩蕃)ですよ、これをくだいてい

タバコですよ。天久さんがやつて来てタバコくれるんですね。ここの不自由舎に来て、何かの場合にタバコくれますよね。おじいさんおばあさんに一本ずつでもいい、ほんとにあげますよ。わたし自身タバコ吸わないからもらわないとですがね、もらつたそのタバコどうするかといえば、タバコ一本とですね、蕃一斤と交換するんですね。米一合とも交換するんですよ。で、わたしはもうそういうものは袋に入っているから問題はないけど、ありがほしいもんだから、友だちとタバコ一個とですね、石油一合と交換したんですよ。で、それを明りにつけたんですよ。そうした中でですね、不自由者といふ最低の線の中にですね、そこからぼくは、われわれは人間性を見いだそじやないかということで、女と男の子とで集めて、今から食事する場合には代表して出してこいと、そして付添が配るものを見んな善んで食べる、信頼しなさいと、付添を信頼しなさいといふことを指導してですね。それじゃということで、女の代表が来てですね、あんた方も同じだよ、男のほうばっかし東を入れて女のはうには悪いものいれるかということの監視ですよ。それを見てからですね、よしといって、それから順ぐりで付添を行つて、手伝つてきなさい、こんなことで勝負いたら大変だということで、そうした最低の生活の中に取り組んでいくつて。

そして弱い入たちはどんどん死んでいくんですよ。ほんとうからいくとわたしのように、手足のない、こうした者はですね、もうとつくな死んでいるんですけどね。この新垣さんといふいい友だちがいたもんだから、この方々がわたしのためにですねいろいろと食糧をもつてきてくれたりしてですね、ようやく生きのびたんですよ。そ

きよつたんですよ。それでお腹満たすんですよ。ところがT・Bでしょうね。とうていあれですよね。その子が入つてきてからね、いつも嘆きよつたのはあの籠詰配給が食べたい、テンブラーが食べたいといつもいふんですよね。ところがこれがもうしょっちゅうなんですからね。ダシにしか使わなければね。食べたことないんですよ。まあそのとき、食糧はあまりないですから。それでこの子が夜中で便飲んだんですよ。栄養失調つて夜通し小便がよく出るもんですけれども、翌朝になつたら死んでいたんですよ。栄養失調でT・Bでしょう。ひもじくて、とうとう枕元においてあつた籠から自分の小便飲んだんですよ。栄養失調つて夜通し小便がよく出るもんですね、枕元に空籠おいておくんですよ。あれは殺したようなもんですね。あの悲惨なあれが、何といいますかね、友だちとか、ほんとにあのときの食糧。それが後からですね、豊かになつたときにね、ぼくたち友だち同士ね、今まで垣本くんが生きておつたならねえ、これも食べさせるのに、これも食べたいというておつたなあ、と言うたところです。あのとき、ないときにどうどう死んでいつちやつたんですよ。だからわたしもね、友だちに恵まれなかつたらああなたよつたかなあと思つたりしたんですね。わざわざ端っこから端っこのところにいってですね、ウムグワーもらいにいきよつたんですよ。あれは何かもうほんとに、捨てるもんですよね。もうほんと、あの当時のことをいうたらね、海から流れてきた何か知らんような、ぶくぶくしたもの、臭いようなものもね、食べてからに、やつておつたときもあつたんだけどね、ほんとあのときはもう一。

新垣 空腹というものはですね、食糧が豊かになったからといって、すぐに治るものではないですよ。一と二年、二と三年続きますね。

宮城 そうよねえ。

新垣 わたしはいつべん戦争後、まあかなり食糧事情がよくなつてからの話ですが、あんまり腹が減るもんですからね、毎日、いつぶんでもいいから満腹感を味わいたいといつたら、わたしの隣りにいた友だちがですね、いつべん満腹してみようじゃないかというので、その頃からは蕷なんか売りに出す入がいました。自分で作つてですね。よし、じゃきょうは満腹しようやといふんでですね。財布の底をはたいて、蕷を五斤。それ以上買うお金はなかつたものですから、五斤だけ蕷を買って来ました。それで炊いておいて、それから、今食べるんじゃないぞといつてですね、夕食をしませてから、それからこの蕷二斤半ずつ分けて食べました。ところがそれでも、全然満腹感を味わえない、これはいかん、じゃおまえのもというんで、当時、黒砂糖もあつたさあ。

宮城 黒砂糖もあつたよ。

新垣 どこからあつたのかな。黒砂糖をまた二斤買つて来てですね、それを半斤ずつ分けて食べたんですよ。ええ、そのすぐ後でー。

それでも何ともなかつたですね。あればいくらでも食べられるくらいですよ。

宮城 わたし二斤食べたよ、蕷。友だちが二斤蕷持つて来てあつたんですけど、いつべんに二斤食べたんですよ。

やんと蠟をかけられたですね、水のもらないやつですよ。それが落ちているのを見た人は見なかつたんだなあ。そしてぼくが見つけた。ええ、目はその頃はまだ何ともなかつたです。そして何だらうと思ってあけてみたらですね。角砂糖や、それから何といいまして、煎餅みたいなもの。カンパンもはいつてました。いろんなものがはいつているんですよ。ちょうど、あのう、さっきの話の領事館に勤めておられた根路銘さん。その人だけですね、蠟から出られないで、あのとき自分が悪かったんですから蠟にいらしたんですよ。よし二人で食べようと思つてね。もうすぐ引き返して、轟んで行つたら、ちょうど根路銘さんが蠟の入口の前の爆風よけに腰かけておられましたからね。はあ、いいのを搜してきましたよといつたら、どうしたんだいというから、いろんなおいしいものがはいつていると甘いもの、お菓子なんかが入つていて、そうか、そうかといふんで、二人で食べようとしつたらね、タカちゃんとセツちゃんがそこに来たんだよ。

宮城 学校の子どもです。生徒ー。

新垣 わたし、みんなからおじいさん、おじいさんと呼ばれていましたから、当時。おじいさん伺してると来たんですよ。せつ

かく根路銘さんと二人で食べようとしているのに、困つたやつらが来たもんだと思って。分けてやらないわけにはいかんですからね。しかたがないから。二人で食べようと思つていたのにね、四人で食べたんですがね。あのときはもう、どうも変なところに変な子どもたちが来たもんだと思ってですね、顔には出せないけれども、しゃくにさわつてました。今思いだしても恥かしい気がするんですけど

新垣 そんなに食べても平氣ですよ。  
宮城 平氣ですよね。

新垣 平氣でした。

宮城 鍋いっぱい水入れて、カタツムリ入れて、そしてそれをですね、味つけるのはですよ、さつき話した黒砂糖と、塩ですね、少し入れたら、いい味がつくんですよ。あの塩にですね、塩そのままじゃ、にがくてだめだから、これに黒砂糖を少しいれたら、おいしいおつゆが出来るんですね。それをしたらですね、このパケツ一杯のものですね、子供、一人は十五、六歳と一人は何歳か、三名でですね、一杯たいらげましたよ。それで満腹感しないからね、水ばかりのんでー。だからわたしが一番御馳走というのはズームであるとか、あるいはさつきいつたカタツムリであるとか、ああいうのが一一番。さつき話した黒砂糖ですね。あれはわたしたちのところでは非常食糧として持つてましたからね。あれに塩よ。そのままじやちよつとあれば、塩では。おつゆたいたつておいしくないから。少し砂糖いたらですね、いい味がするんですよ。黒砂糖とは重宝なもんだなと思ってですね。

新垣 だから今でもね、忘れられない恥かしい気持になるんですね。愛楽園にはもう爆弾が落ちなくなつてからの話ですがねアメリカさんはもう上陸していました。こちらには毎日というほどですね、どこか向こうの羽地あたりからやつてきたんだと思いますけどね、兵隊が毎日来ていました。アメリカさんがですね。その頃海岸を歩いていたんですよ。ぼくの前から仲宗根さんね、あれ歩いていたんですよ。そこに箱が落ちているのを、携帯食糧ですね。ち

ね。

宮城 根路銘さんは師範出るときにも一、二番で出た方ですよ。それから東京にいつて、青山学院が出て、あれで苦学なさつてですね、領事館の外交官試験も合格して、あのとき青島の領事館にですね、勤務中に発病して帰つてきましたよ。そしてあとになつて自分が見えなくなつて。あのとき来たとき、そこは自分が見えましたけどね。それでも戦争中は見えなくなつちゃつたんですよ。英語がうまいんですよ。だからこの園長先生がね、この人をアメリカーの前へ連れて行かなかつたんですよ。というと、その人にいうたら何かがまれはせんかというあれですね。それで根路銘さんのところに連れていかなかつたんですよ。何か持つていたら、ギブでもらえるあるがあるんですよ。だからね、米軍と接触せなかつたんですよ。だからね、とっても可哀相だったですよ。で、それが学校のですね、蠟の隣にこの人、不自由者の蠟がありましたからね、で、今いうように蠟の外で日なたぼっこなんかしているときがあるんですよ。子どもたちはさつき話したように、農業の手伝いしていますから、特配があるんですよ。

そのキビをね、いくらかまた切つて子どもたちの間食にあげるんです。あるいはまたカボチャの実をですね、何かくれるというふうにしてあつたんですよ。で、そのキビなんかのね、子どもたち、特配があつて食べていると、その音聞いて、根路銘さんが、おい、何食べていいか、何食べているのかといつても、誰もいわないんですよ。分けてあげるのないんですよね、キビでさえも。

わたしは、戦争中で一番おいしかったと思うのはですよ、わたしの教え子がもう青年寮にいるときですね、どこからか知らんけど藪を探してきて、煮てですね、先生、藪食べませんかといってですね、その藪のおいしさというよ。あんときの藪のおいしいというのは、もう砂糖よりおいしい感じがしそうだな。壕の生活のときですよ。ほんとにあのときには、わたしはあれよりおいしい藪の、あの藪の味ですよ。忘れられんですよ。だからあれだけの藪がね。センゾウ、おつたでしよう。

新垣 ああセンゾウ。可哀相な子だねえ。

宮城 戰争で栄養失調で死んでしまったんだけどね。わたしのところの藪、ひと掘りの藪だったんですけどね、あれをもらつたときにはもう何ともいえんかったですね。だからわたしはそうした人たちの恵みがあつて生きながらえたと思ってるんですよ。ときによるとですね、炊事場に出ている炊事婦の人が、こつそり味噌ですね、味噌をもつてくるんですね、あのときにみんな御飯ばっかしつくらんでしょう。それに味噌をね、少し食べるとか、あるいはまた、青年寮の方々が特配だといって人参ですね、人参そのまま、生のまま分配するんですよ。で、壕の中でそれを生のまま食べてているんですよ。だから戦争中はもう一般の人もそうで、わたしたちが痛感するのは、病人であるわたしたちでも、こういうふうなことをですね、させられて。

そして人間という、人間性を認めないでおつた中でもですね、わたしたちはこうして踏みにじられて、ことにわたしは自分で体験してみたのはですね、わたしは信仰にはいった動機もひとつはそこに

あるんですよ。神というものを否定しておつたんですよ。ところがこのひもじさを押さえるためにですね、誰か友だちがですね、わたくしに旧約聖書を預けてくれたんですね。何だそんなものといつて。しかしあらう活字に飢えている時代ですからね。

何でも読みたいという感じがあるんですよ。

時間がきたらひもじくなるんですよ。十二時御飯だつたら十時頃からぼつぼつひもじいですね。そのひもじさを耐えるためにそたしに旧約聖書を預けてくれたんですね。何だそんなものといつて。しかしもう活字に飢えている時代ですからね。

新垣 ああそうだから、ただ読むというだけで――

ひもじさを抑えるための読み方だつたんですけどね。

あの、事務長が食糧確保に苦労したという話を聞くのですが、入園者にひびいてくるというよりはですね、食糧確保というものはですね、チビチビだすというあれですかね、いくらあるのか。

新垣 むこうに在庫がいくらあるのかということは全然わからなさい。

宮城 あのう一番これがあるんですよ。食糧の話になると。じつはこれが占領されてからですね、ここに事務長さん、泉正重さんがね、屋我地の村長になつたわけですよ。そしたら屋我地島民は、ここに籠詰とか、いろんな食糧が米軍からあることを知っているもんだから、泉正重さんに、村の藪と交換するように働きかけをしたらしいんです。泉正重さんもまたそれをやろうとしたらしいんですね。ところがわたしたちはですね、屋我地島民は、できた藪をここに供出する条件で、軍には供出をまぬかれたことを聞いてるんですね。わたしたちはそれで、籠詰と藪と交換する話を知ったの

て、勝手に藪をとつてこいという命令されたとき――

新垣 ああそうだったのかな。

宮城 それでね、藪とりに行きなさいと園長が命令したんですよ。もう藪の供出がないから。そしたらもんだから入園者のほうは、もう不自由な人であろうが何であろうがみんなそろつてね、畑に藪とりにいつてるんですよ。

新垣 あれはね、高嶺さんがね、これじゃもう大変だ。何とか食糧をもう少し何とかしてくださいといつたらね、焼け跡での話よ、高嶺さんがね、そんとき、部落の畑から藪掘つてきてもいいかと早田園長にただしたんだよね。そしたら、生きるために仕方がないだろうと園長はいつた。それで行け行けといふんでね、みんなに触れて藪掘りにやつたんですね。ところがそれを今度は村からね、愛築園のやつらは藪を盗んでいる。けしからんと文句がきたんですね。そのとき園長はね、自分はとりに行けとは言わなかつた。とりに行けば絶対言わなかつた。なるほどとりに行けとは言わなかつたですね。ただ生きるために仕方がないだろうということはおつしゃつたけどね。自分はその何か、患者をそそのかして藪をとつてこいとは言わなかつたというんで、どうも困つてましたが――

宮城 あのときには泉さんは村長になつてたでしよう。だからその確執があったわけよね。部長さんからね、本当は自分が島長であるといふうに予定しておつたはずよ。あの園長は――。

新垣 園長はね、自分は屋我地の島長である。泉さんは、いや島長はおれだというんでね。二人はとても――

宮城 二回ぐらいあつたんですよ。あれは弟が食堂におつたもんですからね。

新垣 ああ、あれはそつだつたのか。

宮城 ああ、あれはそつだつたんですよ。あれは弟が食堂におつたもんですかね。

新垣 ああ、あれはそつだつたんですよ。あれは五月二十三日か、ぼくは覚えてるんだけどね、ぼくの足を切断した日なんだよね、園長のほうにいった。そしたら部落の人たちがどうしても藪の供出をしないもんだから、園長しゃくにさわつてね。入園者に対し

よ。

新垣 戦争中のり切ったのはですね、まあ泉事務長と園長がうまくやつたから、ようやく戦争をのり切ったかもしません。ところが戦後ですね、米軍から、そのう、いわば向こうでは敗残兵といつてましたがね、そのひとたちをかくまつて、食糧などをやっているそ

うじやないかという疑いがもたれたわけですね。そうすると園長は実際はやつておったわけですよ。園長は、いや自分は知らん、泉に聞いてくれといったそうです。そしたら早速泉さんが引っぱられた、やられるいつたわけです。さあ、事務長が米軍に引っぱられた、やられるんじゃないかというんで、みんな心配していましたがね。幸いやられないで帰つてこられた。そして、それから仲悪くなつたんですよ。園長たる者がね、自分の責任を事務長に押ししつけて、泉に聞けといつて。自分を車にひっぱらして、向こうでさんざん、問いつめられて、自分はとても困つたと。わしのひとことで、これは園長の命令でやつたんだということをひとことでもしゃべつたらあんたの命はなかつたはずだぞ、といふんでね。二ヶ月、二ヶ月で二人は仲悪くなつてしまつたですね。そして、最後に、屋我地に島長というのがありまして、ええ米軍が任命したんですよ。それを園長がいや自分が島長だといって、泉さんはまた自分だと言つて。

宮城 それで園の中をよく知つてゐる泉さんが島長に行つたんですね。だから食糧もそういう事情であるのに、供出しないということですね、問題があつたんですよ。そうした確執があつてね、両方とも大変つたんですね。そうして事実また園長がやつたといふわざですけどね。運天のほうで、日本の将校が死んでおつたらしいんでまた削るとかいうことですけどね。

宮城 それだけは、ほんとあの先生は。

新垣 このほかですね、立派な壕が出来ていたんですよ。これは建

築するために全部削つてしまつて今はもう何か貧弱になつたが一。う人はおりませんからね。

宮城 あそこにだけ少し残つていますけど、あれも病棟造るためにまた削るとかいうことですけどね。

宮城 だからもう大変なあれだつたですね、あのときに。

新垣 ひょとしたら、高嶺さん、園長先生にとめられたかもしれない。今から考えると園長先生は確かに非常な功績があつたわけですね。

宮城 とめられたとかつていていたよ。もうひどいのに、そしてあんまりひどいもんだからといって、解散命令までやつたといふんです。自由行動をとれと。職員も自由行動して入園者も自由行動をとること。

新垣 あれはこうなんだよね。それまではあの落ちる爆弾があつ五六十キロ、せいぜい二百キロぐらいでした。ところが三月の十日だったかな、三月の十日だ。八百キロ爆弾が落ちたんですよ。直径十メートルくらい、こうのぞくとですね、青く水がたたえているんですね、そういう爆弾がこの丘に落ちたら、あちこち壕はひとたまりもないといふんで、園長驚いてですね、もうみんな自由行動をとれといつてそれからだいぶ減りました。半分くらいになりました。

すよ。その人の死体の中から、手帳の中からですね、愛薬園から米

何袋、もらつたとかいうふうなことを書いてあるのがわかつてですね。実際、園長は軍のほうに入園者からの食糧をですね、やっておつたということで、あれ軍法会議にまわされたよな。

新垣 かもしらんな。

宮城 で、それしたんだけどね。しかし軍としては、あんたはライ

者をそれだけ守つてきたんだから、その功によつて本土に引き揚げさせたんですけどね。だからああいうふうなことがあつて、あれでいつへんは憲兵がですね、手入れに入つたんですよ。そこに敗残兵が、かくされているんだということで、入園者を全部ですね。

新垣 入園者の中にまじつてやしないかといふわけです。全入園者を広場に集めてですね。顔出して。

宮城 ところが職員のほうが逃がしておるんだな。入園者の方にまぎれこんでると思うんですよ。そして二、三人ぐらい健健康な人たちは、ああ、お前は兵隊じゃないかといつてですね。こつちの作戦はですね、病氣の悪い人から入つていなさい、元気な人はすぐ出るといふことであつたんだけどね。あのときになだ軍にふれるような日の丸であるとか、あるいは何とかいろいろ、ばくなんか奉公袋あつたんだが焼き捨てなさいといつてね、やられたんだが、しようがなかつたんですよ。急にですよ、憲兵が来てですね、だから、あとで、こうだということをぼくは聞いたもんだから、もう大変だといつて、やつたんだけども相当あのときにはねー。

新垣 早田園長はなんですね、もうここにおられた頃は、みんなか

ら非常にいやがられてですねえ、懇懃の声がもうひどかつたです

新垣 いやまた後でボツボツ帰つてきましたよ。

宮城 帰つてきたりですね。またあつちで死んだ人もおるんですよ。避難中に死んだ者もおるんですよ。まあ帰つてきた人もおるし、おるんですけど、ほとんどの人がそのとき一死んだ人もたくさんおる。

新垣 しかし不思議なことに、あの八百キロの爆弾の落ちるときは爆発音はそんなにしなかつたですね。ワーッというような感じで、出てみて難いんだですよ。

宮城 この新垣さんもですね、直撃弾に当たつたんですよ。この壕のあつちのほうに統監部の壕というのがあるんですよ。でそのほうにいて、小便するとかつて出たそつだな。

新垣 小便がしたくなつてですね。おい今飛行機おらんだろうといつたら、誰かが待つてよ待つてよといつてね、壕の入口から耳を出して聞いていたんですよ。ああ聞えない聞えないといふもんですから、わたしその頃ちょうど松葉杖をついていました。松葉杖をついて、出たとたんにですね、爆音がブルブルと聞えだしたんですよ。それで後ろに引き返せばよかつたんだが、すぐ前も壕ですから、そこへかけこみました。そこにはですね、医局の女の子たちがですね、五人ばかりいたんですがね、医局に勤めているそこの患者なんですね

宮城 看護手伝いしておつたんですよ。

新垣 そしたらもう、わたしはその壕に入つたとたんにですね、も

う爆弾がバンバンバン落ちるんですよ。それからひとつはあとあの、落ちた跡を見たら五〇キロの小さいやつなんですよね。わたしがこう何か背をもたれていたすぐしろに落ちたわけです。中じやなくてですね道側、それが落ちたとたんに、ちょうど何でしゃたね、棒で胸と頭をぶんぬぐられるような気持でした。ずっと意識がなくなつたんですよ。

宮城 気を失なつてしまつたんだ。

新垣 ところが次第次第に意識が戻つたんでしようね、ああぼくは小便しに出かけて、この壕へ入りこんだんだが、もうまっ暗なんですよ、部屋の中。おかしいなあぼくは、そうか、どこかやられたかも知れんと思ってですね、してしたら、讃美歌の声が聞えるんですよ。ははあ、これはてっきり死んだんだなあ、ほくの葬式で今讃美歌を歌っているんだなと思つてですね。しかしこんなまっ暗じゃどこへ行つたらいいんだろうと思つていううちにだんだん意識がはつきりしてきたんですよ。

そしたらこの辺、胸のあたりまで土にうまつていました。その女子たちがですね、五名讃美歌を歌つてましたがね、わたしの葬式じゃなかつたわけです。

宮城 女の子たちは氣丈夫ですかうな、やっぱしもう死ぬという覚悟をしておつたんでしょうね。ク主よみもとに近づかん」という讃美歌を歌ついたらしいんですよ。だからあの当時ですね、また一番おもしろいのはですね、四月のですね、二十三日頃、だつたですかね。運天港のほうに米軍が上陸はじめたわけですよ。上陸舟艇でそして来たもんだからですね、園長があそこに敵が上陸して来るみ

たいだから、エイキさん、あんたつて見てといといつてエイキさんがそのそこちちゃんと監視所がありますから、いつて壕から見たらですね。どんどんとアメリカのあれが上陸するのが見えたらいいですよ。それで園長に報告したら、こうなつたら逃げようかな、ところが若い青年寮におる方々はですね、竹槍を持ってから、突つこもうかということになつたんですよ。そしたら園長はいやそしたらいかん、そうちらいかん、来たらすぐ手をあげなさいと教えた。あの人はね爆音を聞いたらね、もうほんとにあとは子どもみたいに逃げるの、恐怖症でね。みんなことはいうけどもですね、ばかりに逃げるんですよ。だから自分でいけばいいのによ。青年団の人に、おーい、おりてきたおりてきた、こっちの方へきた、そうちそれじやといつて自分は逃げる。

新垣 最初はね青年寮のぼくの所にきたんです。だから上陸は必至だと、みんなはもう、竹槍を作つて一人でいいから敵を倒すじやないかと、竹槍を作るがいいかといつて来たんですよね、わたしはもうしようがないですからね、まあいいだろうといつたんです。そしたら、竹槍をちゃんとこしらえているんですよ。これはどうも、どうしたらしいのかと思つて泉先生にね、じつは青年寮でこうこうで竹槍の準備をしているといつたらね、泉先生びっくりして、それから入園者、全入園者集めてね、壕の所に、敵が来たら、そのまま手を上げて通せ、そして敵が愛樂園をすぎた頃、羽地から友軍が、羽地で迎えうつはずだから、そのとき寮から抜みうちにしてようと、だから上陸してくるときにはね、絶対抵抗したらいかんと、いう話があつてやつとおさまつたんですがね。あれもう、もし、青年もんだから、あんだ方いつてからやー、ここは療養所だから、爆弾落とすな、食糧くれという交渉しろといつたんですよ。

それで新垣さんは仕方なくいつて、そして向ういつて、地図を見せながら説明して、ここはこうだと、療養所だといって爆弾を落とすな、とそれからまた食糧をね、よこせという事を交渉させたんですよ。そしたらアメリカ兵たちみんな来るもんだから、わたしはもうしようがないもんだから、オールレバーだといつたんですよ。みんなレバーだといつたんですよ。そしたらびっくりして、あれからああそうかといつて、あのとき、地図を見てからにここは療養所だといふうにしてやつたでしょう。それでわたしはレバーだといつたもんですからね。そしたらボケットから、包帯やら、ガーゼやら出して、女の子のハンカチやらとか何とかいうふうにしてやつたんですね。そうしたもんだから、わたしはヒージャー(山羊)を持つているもんだから、ギブ、ミーといつたんですよ。このヒージャーくれといつたんですよ。そしたらくれたんですよ。それからついでにいい気になつてから、この馬までくれというんですよ。ノウノウ。そしたらね、ヒージャーはくれたんだけど、馬はくれないですよね、そしてしようないからね、今度あのあすこにいつた

宮城 二日目か、そしたら出て来てですね、もうみんな集まつてこなさいよ、出て来いというよ。ああ、いや出るな女の子は。じや出てみようといつたらですね、あそこからこうして来るですよ。そしたらどうしようかなと思ったんだけどね、もう。

新垣 それはあの馬に乗つて來たって、ああ、あれは二日目なんだのたくさんの方隊に囲まれたんですよ。この統監部の方々も出て

らね、これたくさんおるか、それかということを英語でいうたら、もうあつちこつち單語わかるもんだからよ、ああそうか、あつちにあるか、よしといってね。ぼくは子どもたちを使って部落行ってから、ヒージャーつれて来いというて子どもたちを行かしたわけよね、あのときに。ところが統監部のほうではめったに人の物を盗んじやいけないという禁止令が出ているんですからね。盗んで来た物みんな統監部が取り押えるというんですね。

新疆 あれはつぶして食べてもよかつたんだよね、あとから考えると。

宮城 それでね、わたしは子どもに二頭盜ましてきたんですよ。ところが統監部の人は困るからといって、じゃわたしをさくぞく新疆さんに子どもたちにねヒージャー二つ盗んで来たよ。どうするか、あんた目をつぶれといったんですね。もう知らんふりしていくくれ、ぼくたちが殺させるからといって、それ日夜、若い人たちにこつそりさせてね、夜来てドラムかんのほうに二頭入れさせて、もう子どもたちにやらなくちゃいかんと。ひものい思いしますからね。やろうという考え方で、ドラムにやつたんですよ。そしたらあとで新疆さんの所にいてね。もう今日ころすの黙つていてくれよ、ラーモウ学校は教育の管轄内だから、部長さんみのがしといてくれよといつたら、よしよし黙つておこうというので何もなかつたのですけどね。わたしがもらったヒージャー、統監部の人が食べてしまつたんですよ。

新疆 最初の日に上陸してきたときには、そこに堀割りがありますね、あっちは統監部の壕でしたが、その前は医局の壕で、その壕の

もので何か具合のわるいことがおこっちゃいかなと思って、これをはぎとつてのみこんでしまったんですね、そしたら出たところが銃をかまえてですね、あのときのあの目玉、まだ忘れられんね。

宮城 わたしもこわかったなあ、あっちから出てこい。出てこいいつてですね、あっちみたら、こっちこうして散開してくるんですね、向つてくるものだから、こわくてよ。

新疆 日本の兵隊いないかと、わたし、ききわけられたんですねがね、これ、答えた大変と思って、黙つてましたよ。そしたらその中のひとりが、これはまた小さい人でね。ほくらぐらいの背丈の小さい兵隊さんでした。これが中方へ走つていった。しばらくして、そうですね、半時間ぐらいいたしましたかな、ほくら五、六人のアメリカに、銃をつきつけられて、そこに立つていましたがね。それが帰つてきてですね、レバース、みんなライ恩者だと、いつたんで、すぐひきかえしたんですね、そのときの目玉、とってもこわかつたですよ。ところがですね、帰るとき、その壕に森山さんという夫婦がいましてね、その奥さんのほうが、帰りかけたのみて顔をだしたんですよ。そのときヒヨツと振り返りましたがね。女を見る二コッとしたね。

宮城 あんときもさ、壕のところにあつまつたとき、女の子たちによ、ハンケチなんかやつてね、わたし、手のほうはもう傷してましたからよ、わたしにたくさん包帯なんかくれてね、それからヨーチンなんか。

新疆 あれはその翌日なんだよ、殺しはしないということわかつたからね。

そばにですね、あのなにか、石灰をつくる窯があつた。その窓の中にも五、六名不自由の人たちがはいつてました。そしたら清太郎がいた。清太郎がその壕から出でますね、放尿しとつたそです。それでヒヨツとみたところが、ずっと向うに二、三十人のアメリカさんが銃をかまえておつたそですよ。ビックリして手をあげたら、そしたら中から四、五名、銃をかまえながらおりてきたそです。この人は手をあげながら立つてたわけですね。そしたら、アメリカがきたたどりするかといって、そしたら壕の中のひとがですね、お前は殺されてもいいから、死んでもいいから、中に入いるようなことはいうな。

宮城 お前ひとりは犠牲になつてもいいからね、壕の中にはいってくるなと。

新疆 そのアメリカのやつが統監部の壕へいつたんですよ。その何日ぐらいか前からかわかりませんがね。アメリカのやつら壕のところへ出てこい、出てこいというそだて、出てこなかつたら、手榴弾を投げ込むそだていう話を聞いてました。あれどつから伝わつたのかなあ、そういう噂がありましたからね、統監部の方で、もしかしたら仕方がないみな出ようや、手榴弾投げこまれたら困るから出ようということに決めておつたんです。そしたら出てこい、出てこいと変な声がするんです。中にひとり、与那国の人でずうたいが大きいけれども、非常に小心なやつがおつたんですがね、ワイ、メンソーチヨン、メンソーチヨン、いらっしゃいませという意味ですね、アメリカにメンソーチヨン、メンソウチヨン。ほくらここに、死んでもわかるようにネームカードつけてたんですよ、こんな

宮城 それでもう英語はあんただから、あんたいつてこい、いつてこいと、いかしたらよ、そしたらなんか地図みせてあれやりよつたでしょう。

新疆 そしたらね、こんにちはといって、近づいたらね、ユー、スピーク、イングリッシュといつてね、腕つかまえられてねこいといふんですよ、ハアと、これもうどこへひっぱられるのかと思って、すぐそこにすわらせて、そして地図をひろげて、今自分たちがいるところはどこか、ここはどこか、そり、今考えるとあれは無線電話だな、あれは、無線電話でね、ペチャベチャ何かいつてましたよ。そして飛行機にもちろんといっておくから、もう大丈夫だから、こは空襲しないから、出て歩いてもよろしい。また事実でした。それからもうことは全然空襲なかつたですね。それで古宇利やその部落の人、がたくさんはりこんでましたよ。ことが安全だということがわかつてですね。それがちょうど四月二十三日です。米軍がきてから撃ち殺されたというようなことはなかつたですね。

宮城 ほくらの隣りの壕におつたんですが、看護婦だけ残つてしまつたが、その看護婦連中がきて、増田さんという日本人の看護婦さんが、どういうふうにしてあんたがた許されたねえといつたから、みんなオール・レバーといつたよ。オール・レバーといつたら大丈夫だよといつた。そしたら、そなうかそなうかと聞いておつたのだが、ところがこの人が洗濯しておつたらしくんですよ。そこへヒヨコツとアメリカ兵が来てね、きたんだからもう、レバー・レバーといつてね。看護婦さんが逃げだして。

新疆 あの、もうずいぶん腹減らしてみんな大変でしたがね。あれ

何日だったかな、三月の何日かだよ、わたしが壕の中を失なつた日なんです。この丘だけですね、もうたて焼けにやられたんですよ。みんな壕にはいってますから、ひとには別状なかつたんですけど、あの頃ですね、農事部のニワトリ、牛、馬。何十頭かの豚、全つくらうじやないかと、青年部の連中と打ち合わせとつたんです。

宮城 豚舍やられたね、あれ何日だったかね。なれば頃かな、三月の。どうしたかといったらね、最初学園の壕はですね、この火葬場のところだつたんです。そしたら、ここじゃちょっと狭いから、半坪つくらうじやないかと、青年部の連中と打ち合わせとつたんですよ。ところがそのとき、大型の爆弾がパアパアと落ちて畜産部のトリやら豚なんかみんなやられちゃつたんだよね。そうしたもんだから、青年寮の連中たちがもうビックリしてね、もうひどかつたから。それでどつか一番安全なところないかといふ。あととき撫挫してですね、歩けないんですよ。もうあの若い連中たち一緒にできないもんですから。それでわざひとりだけ壕の中に残つておつたんですが、子どもたちはもう早くあつちへいけど、安全な壕の中に逃げなさいといふことで、向うにいかしてね。そしてぼくひとり残つておつたるね、そしたら、畜産部のそばにある壕の連中たちが、どこの壕がいいかなって、安全な壕をもう探し勝負ですよ。で、わたしは仕方がないから、そのときに、あとでですね、夕方頃、子どもとあつちへいつたんですよ。広場一ここのことろは地盤が低くてね、それで危険だつた、海岸端だから。向うのちょっと奥のほうで、そこに移つてからあそこのところを拡張してつくつたわけよ。それで、統監部の方々もですよ、屋中はぼくたちの壕のことろにき

りやら豚なんかみんなやられちゃつたんだよね。そうしたもんだから、青年寮の連中たちがもうビックリしてね、もうひどかつたから。それでどつか一番安全なところないかといふ。あととき撫挫してですね、歩けないんですよ。もうあの若い連中たちと一緒にできな

いもんですから。それでわざひとりだけ壕の中に残つておつたんですが、子どもたちはもう早くあつちへいけど、安全な壕の中に逃げなさいといふことで、向うにいかしてね。そしてぼくひとり残つておつたるね、そしたら、畜産部のそばにある壕の連中たちが、どこの壕がいいかなって、安全な壕をもう探し勝負ですよ。で、わたしは仕方がないから、そのときに、あとでですね、夕方頃、子どもとあつちへいつたんですよ。広場一ここのことろは地盤が低くてね、それで危険だつた、海岸端だから。向うのちょっと奥のほうで、そこに移つてからあそこのところを拡張してつくつたわけよ。それで、統監部の方々もですよ、屋中はぼくたちの壕のことろにき

て一安全だから、夜はまた自分の壕のことろにいってね、そういうことをしておつた。

新疆 そういうひもじい時代ですね、この豚や馬が全滅したもんですから、ご馳走にありつけました。すばらしいもんでした。

宮城 だからもう、食糧というか、もうほんとにひもじい思いを。ただ、わたしたちが今いうように、その当時の園長ですね、入園者の人権をまもつてくれないで、ああいう悪態をついたということは、非常に印象的であるが、しかし結果的にみたら、あれから反抗的なものがで、自分たちが生きながらえたということにはなると思うんだけどね。

新疆 ああいう先生でなかつたら、うまく戦争をのりきることができなかつたかもしれないね。

宮城 すぐ食糧の一。あのときの先生がいうのは、傭かざるもの食うべからず。それから少しの土地でもみな苗を植えろ、食糧を植えろ、花なんかつくっちゃいけないと。

新疆 いまの戦が負けた、という知らせをきいてもですね、私たちがその残念だといふよりはで、やっぱりほつとしました。

宮城 ほつとしたときのほんとのあれは実感だな、あのときの場合には、わたしたちがですね、最初に十二月八日のとき、日米戦がやつたと、その布告が出たときですね、このときまた一代の園長塩沼先生ですね、あの先生はもう性格家で子どもみたいでね、非常に大らかな人だつたんですね。それがアメリカと宣戦布告してハワイの真珠湾攻撃したという本をもつてきてですね、園内ふれまわって歩きよつたんですよ。わたしのところへきて、よう、やつたぞ、ア

メリカとやつたぞ、ハイやりたよなんていつてですね、やつてあるきよつたんで、あれはまだまだ覚えるですね、十二月八日のあの戦争のあれですよ。ラジオはわたしたちには全然ありませんでしたから。ところが早田先生なつてからですね、大本営発表するんだけどもうち驅八百ばっかしいうてね。みんな集めてですよ。大本営発表というんですから、あれはもうケッサクだつた。

新疆 三月の空襲以後はですね、どこからもニュースがはいるはずはないんですね。ところがときどきその入園者を全部集めてですね、これから戦果を発表すると。敵艦をいくつやつつけたとか、敵機を何機おとしたと大本営発表だといふてその発表するんですけどから考えるとあれはみんなつくりごとだつたんですね。そんなニュースがはいるはずはないのに。

宮城 しかし早田先生はですね、この沖縄というものがそういう非常事態におちいるということに対しても、発表所をどうするかと。そのためにはやっぱし軍部の力をかりなくちゃいけないというようなことで、こんどこっちに移つたときに自分は憲兵の資格をえて赴任したんだということで、軍刀をもつてね、双眼鏡もつて、凜々しい姿で赴任してきたんですね、あの九州分会いつてから。ところがいざ空襲警報でもかかつた場合にはもう這々の体で、おい空襲だそだよ、はやはやくと自分のほうが逃げちゃうから。あれには、もう。ぼくたちは若い青年寮の連中たちみんな監督しているでしょ。学校の子どもたち、それから青年寮の青年たちとか、この青年団長がこれ見てきてもう笑い話にすること。

新疆 いつべんね、ぼくと高嶺さんと上原健太郎さん。ちょうど今

の事務所と、あのカトリック教会のところ門があつたでしょ、そこで園長と話しつた。ところが急にね、話の途中で園長バーッと駆け出して行つた。向こうへ。そして丘のところへこうかくれてからね、大変よ大變よ、敵機だ、敵機だといふんだ。ぼくは何だらうと思つてね。逃げてほんとにもう飛行機。もう見られない。

宮城 ことにこのアメリカ人の恐怖症。もうアメリカ人が来たらですよ。もうあのへたな英語でジスイズなんて出てくるんですよ。ジスイズと、やってからね欲待するんですよ。わたしはですねこつちのほうにいたんですけども米だらもうアメリカが煙草なんかやるでしょ。私たちはね、よくみんなに教えてあつたんですよ。アイ、アム、ハングリーといなさいと。それから、ギイブ、ミイシガレットといなさいといふこと、単語だけ教えているんですけどね。ごはん食べているときにアメリカ来たもんだから、アイ、アム、ハングリーといった。そしたらお前たちはごはん食べるじゃないかといつて。いやいや間違いギブミイシガレットといつて。そういったことがあつたもんだから、よう見にきよつてですね。そしたら罐詰やら、煙草やらみんなくれるんですよ。これまでいいんですがね。おお、今日は大戦果があつたといふんで喜んだら、あとからまわつてさつきやつたもの出せ。収集するんですよ、あの園長が婦長をまわしてね。あれをとれと。どうするか。あれをとつてからね、そのうちからあけて一本喫うんですよ。あれがね、あんなことしてそれで、いつべんはね、こんなことがあつたよ。あの看護婦さんたち。女の子にはあれで親切ですからね、化粧品やらいろいろんなものやつたらしいんですよ。園長は、おうい、ようもらつと

け、ちらつとけ。で、もらわした。帰ってきてから、あれやつた、これやるよ、そのうちから取つてこれやるよ。それをきいたもんだからね、ぼくたちは頬にさわって、よしこれからはストリート、いうことで、アメリカさん来たときにはみんな寝るといったんですよ。それでだれも起きてね病状を見せるとかなんとかいうことをするな、ということですね。そして、園長がアメリカの軍人なんか連れてくるんですよ。来たら病床にいるんですよ。園長はこの人たちが、どうとかこうとか、病状を説明してくるんですよ。ところがもうみんな寝たつきですよ、狸寝入りですね。おいおい、おいおいといつても、だれも返事しないんですよ。みんな寝てるんですよ。もうしようがないから、園長はもう次のところに回つていきよるんですね。あとから園長がまわってきて、どうしてあんたがた起きなかつたのか。何をいうてるとか、もらい物はみんな取り上げてしまふのに、そんなことあるのか、園長にいえと。もう今からこっち連れて来たら、絶対に誰も起きてやらんからということですね、やつたらね。園長自身ね、ある日こつそり、あとで罐詰、大きい罐詰持つてきてくれた。そうしたからまたあとでね、はあ、きょう多分、子どもの誕生日だったんだろうな、なんていって、あんなことしてはわからないですね。アメリカから貰いたな。アメリカがようそこに出でくるさ。

新疆　ああ、日本の敗戦ですか。それはわたしわかりませんでし

戦果あげによく行つたものですがね。その今帰仁からですね、本部のところまで、もうバーッとテントはつてましたよ。そのときに幸雄がよ、行って戦果も挙がらなかつたもんですからね。ちょうど夜だつたそうですよ。兵隊の枕元に置いてあつた鉄砲をとつてきたらしいですね。そしてしばらくしたら気づいてですね、それを。さあそれからもう、アメリカのほう大騒動になつてですね。懷中電燈やら、あつちこつちから照らしてまあ、盗まれたと思つたんでしょうね、探したそですよ。幸雄というのは、地面に腹這いになつてですね、やつとみつからないで鉄砲持つてきてありました。

宮城　米兵が転戦するためにですよ、この人が転戦するために、ちゃんと袋の中に入れてですね、入れてあるものを取つてきたりしないんですよ。だから兵隊が日本兵だつたら、營倉のものですよね。

新疆　これを英治が幸雄からとりあげて、とりあげたのか、もつたのか知らんが、最後には園長にいつて。弾も入つてました。

宮城　バック（弾倉）で持つてきてあつたのね。

新疆　持つてきてあつた。

宮城　勇敢な人がおるんですよ。そして双眼鏡まで盗んできてや。新疆　いやあの双眼鏡はね、園長が自分の双眼鏡と鉄砲替えたんだ。

宮城　ああそうね、それで事務所があつたんだな、双眼鏡が。

新疆　くり舟で。

宮城　ああわたしらもう大戦果ありましたよ、大戦果といつたらおかいかも知れんけどね。英語がわかりますからね。ちょうどいつてから。

け、ちらつとけ。で、もらわした。帰ってきてから、あれやつた、これやるよ、そのうちから取つてこれやるよ。それをきいたもんだからね、ぼくたちは頬にさわって、よしこれからはストリート、いうことで、アメリカさん来たときにはみんな寝るといったんですよ。それでだれも起きてね病状を見せるとかなんとかいうことをするな、ということですね。そして、園長がアメリカの軍人なんか連れてくるんですよ。来たら病床にいるんですよ。園長はこの人たちが、どうとかこうとか、病状を説明してくるんですよ。ところがもうみんな寝たつきですよ、狸寝入りですね。おいおい、おいおいといつても、だれも返事しないんですよ。みんな寝てるんですよ。もうしようがないから、園長はもう次のところに回つていきよるんですね。あとから園長がまわってきて、どうしてあんたがた起きなかつたのか。何をいうてるとか、もらい物はみんな取り上げてしまふのに、そんなことあるのか、園長にいえと。もう今からこっち連れて来たら、絶対に誰も起きてやらんからということですね、やつたらね。園長自身ね、ある日こつそり、あとで罐詰、大きい罐詰持つてきてくれた。そうしたからまたあとでね、はあ、きょう多分、子どもの誕生日だったんだろうな、なんていって、あんなことしてはわからないですね。アメリカから貰いたな。アメリカがようそこに出でくるさ。

新疆　ああ、日本の敗戦ですか。それはわたしわかりませんでし

宮城　あとで八月の終戦がね。アメリカの兵隊たちが戦争終つたよ、負けたよということで。敗戦八月十五日公表としてはないんですけど。アメリカ兵がですね、あの戦後すぐしてからですね、壊出た時分からですね、アメリカ米たら撮影隊が来たんですよ。この生活様式ですねすべての医療の撮影に、毎日のように来よつたんですよ。そうしてここのはうで、全部写真とつて行つたんですよ。たとえば解剖するとかなんとか、わたしたちが病気で連れて行くとかなんとか、全部ですね、写したんですよ。そういうことで、あのアメリカ兵来て、そのときに、わたしはだからさっきあの蓄取りに行けというような時にですね、わたしのとき足手術した日ですよ。あのときに、わたし一ヶ月ぐらいですぐまた癒つたからよ。だから六月二十六日になおつた。五月三十二と三日ごろ定切つてたんですね。そのとき園長がね、みんな諾どりに行きよつたのに、お前は行けなかつたなあ、なんていつてたんですよ。なんですかときいたら、みんな諾どりに行きよつたよというんですよ。そしたらその諾の問題ですね。部落の青年たちはですね犯人捕まるという。たくさんおしかけてきたんですよ。そしてそこで自衛のためにですね。鉄砲でパンパンパンやつたんですよね、鉄砲で。ぬすんできた鉄砲です。キャンプのところへ行つてですね。

新疆　幸雄がなあ  
宮城　あぬあびやーが鉄砲むつちぢやーに。  
新疆　いや、あれは幸雄が持つてきたんだ。  
宮城　ありがむつちえし。

新疆　あのね、ほくら終戦後あのころは戦果といつてましたがね、  
宮城　わたらしら十五銭持つてました當時の。それを出してですね。これで、ひもじくてたまらんから何か売つてくれといつたらですね、ここへこいといつて連れていかれたんですよ。そこはちょうど食糧倉庫ですね、これみんな持つていけというんですよ。おかしいな、みんな買つていののかなと思ってね。三名でつてましたから、帰つて来て、あれみんな持つていけといふんだがどうするかといつたらですね、ああ、あいつら驕いわんからね、いいだらうと。持つていこうと。崖からどんどんあの砂浜に落したんですよ。浜のほうへ。そこに積んでおいて、それから、二人はまたここへひつかえしてですね、それから園中の舟を動員して持つて帰りました。

新疆　あの炬港といつてですね、あの大井川があるでしょう、あれのそ、炬港の川に向つて右側です。  
宮城　だからそこの倉庫いっぱい取つてきたんですよ。一日中かかつたんじゃないね。  
新疆　いやその食糧がですよ、一か年分あつたんじゃないかな、もつとあつたんじゃないかな。

宮城　園に全部配給してね。  
新疆　はあ、そうとうあつたさ。  
宮城　メリケン粉とか食糧ないからといって配給した。それで一人じゃないんだからね。グループでいた人、同じように分けてです

ね、もうだからあれだけの倉庫いっぱい歩きさがしたからみんな夢みてね、わつたーならんさー。

あのときの十五銭は出したらですね、受取りもしないでですね。ちょうどその日はですね、あの飛行機何といふんかなあ。

新垣 グライダーよ、トンボといってましたね、あれの基地だったんですよ。その部隊の移動の日でした。それから古宇利の島の人たちがね、あのアメリカーがほんとにくれたんだろうか、といってですね。

宮城 わたしが下で一人で番してたんですよ、海へ落として。そしたら、あの大ぶん古宇利の人だと思うですがね、五、六名やつてきて、アイ、ウサキーナーカンヅメヌアルムンナーといって、いやあ、これはぼくのものですよといったらね、馬鹿いうな、一人でこんなに籠詰が集められるもんかというんですね。しまった、もう持つていかかるかもしれない、と思って心配しとったんですね。ひょと見たら崖の上に兵隊さん立っているんですよ。おう、あの人からもらつたよといつたらね、兵隊さんおりてきました。そしたら、その人たちは、帰つてきました。

新垣 だから英語わかる人はねいくら。それにまたその事務長の人がね、こうして入園者が大きな戦栗あげたもんだから、入園者におれも連れていてくれということですね、つれていったらしいんですね、いつたら向こうへいつてコック手伝つてね、食べるだけ食べさせたらしいんですよ。ひきあげるとき何も持つてこないんですよ。持つてきたのは、帯とね、あのベレー帽があつたでしよう。アメリカーの、あれだけ持つてきてあるんですよ。そしたら、ぼく

おつたんですよ。長い期間じゃない。五名じゃなかつたですかね。引きあげていくじぶんにはですね。自分たちも逃げついているですけれどもね。たとえば、米軍からですね、園 자체に対して、直接被害受けたということはないわけですけど。なぜかというと、最初上陸したときですね、ここはもう療養所だと、ということを確認させてあつたわけですね。その見方でやつてきたのかも知らんけどですね、非常にあの、好意的であつたですね。あの、たとえば、わたしたちが夕飯に煙草をくれといつたらですね、くれたりなんかした。米軍とそうしたつき合いをした人たちは、今鼎<sup>トキ</sup>では、あとでスペイ嫌疑でいろいろ問題が起つたんですが、愛樂園では、一番最初あのー、われわれがさきに竹槍でやらなかつたということ、ほんとによかつたと思ひますね。古宇利島でこんなことあつたらしいですよ。あのー、何かダイナマイトを投げてね、上陸してくる米軍に。

宮城 きちがいだつたというようなね。

新垣 あのー、島でですね、上陸してくるアメリカ兵ですね、何か、ダイナマイト投げてですね、やつたらしいんですよ。そうしたら、すぐかつたですよ。ということですね、そのほうにですね、一齊に砲撃をやつたんですよ。その砲撃があのーくる、こつちから見たらですね、ヒューーといつてポンとやるんですよ。ヒューーしていくから、ヒュルヒュルヒュルとして、もう爆弾の音がしょっちゅうおきるんですよ。だからあの山からですね、古宇利めがけてね。砲撃やつたんですよ、だからあれ何でやつたかと、そういうふうなことがあつたと。でそれで、古宇利の連中たち全部この愛樂園

かわいそくなつてね、よっしゃ、いくらか籠詰があつたといつてね。だが職員でもそのときのね、大戦果といふのは大変です。倉庫ひとつもらつてくるんだから。

宮城 屋我地だけはですね 四月二十三日からおちつきました。

新垣 だから、あの当時のですね、あの合言葉にですね、一番安全な所が屋我地となってとおつたらしいんですよ。でわたしたちはそこのほうで見たんですけどね。あそこで空襲する、あそこで花火みたいにポンポンポンやるのですね、夜空にもうきれいだつたんですね。それから、いつも空襲していくときにですね、飛行機あがつていくんですね、いくでしよう。日本空襲だつたと思うんですよ。そうするとちょうどあの、大宜味や羽地内海のところですね、あそこで本土空襲だなということで。わたしたち、だから八月まで六月から、わたしは四月からだな。

宮城 ここは四月から。

新垣 四月からもう安全地帯ですよ。

宮城 四月二十三日からですね。

新垣 園の手前の一番とつきの右側の、官舎がありますが、あそここのところにあのー、コンクリートのへいがあつて、穴がたくさんあいていますが、あれは空襲中のもんです。あの空襲中でやられたものがですね、あそこにいま残つていますよ。それから話はかわりますが、日本軍が一つの組織としてここに入つて来たなんのことはなかつたんですが、迎天港からだと思うんですね、南のほうへ行くとき、敗残兵が逃げ込んできて、職員にまぎれこんでいたのが

のほうに逃げて来たんですよ。だからねあれば、ああしたアメリカに対するちょっととした抵抗であると、ここはまたみなやられとつた。

宮城 ああ、そうですね。

新垣 ここはもう最初から、まあ無抵抗の状態で。それからそこはもうオールレバーだという形で。療養所だということをいつたもんだから安全であつたわけですね。無抵抗のほうが。えーとそのとまき、一番よかつたと思うのはですね、事務長さんが英語が達者だったわけですよ。泉さんが。で、こちらのほうでのことは、ハルキさんが英語は、いくらかはあれがあつたんですよ。もつと英語のうまい根路銘さんで方がおつたんだけどね。あの人は、とうとうアメリカ兵と接触させなかつたですよ。あの人は英語、ずっともうあれこれしてますからね。

宮城 外交官ですかね。

新垣 だからあの人いつたら何が出るかわからんという恐れがあつたかも知れんけどね。全然米軍と会わなかつたんですよ。だからあの当時英語のわかつている園長も片言、ジスイズでやつておつたからあれだけ。泉さんがまた、英語うまかつたんですね。

宮城 根路銘さんは、戦後しばらくして亡くなられました。栄養失調だ。長老格で、とってもあれだつたんですよ。よかつた人でした。

看護婦 知念芳子（十八歳）

十・十空襲のとき、十五年頃に建てられたものは、爆破されました。あの日はたしか火曜日か、木曜日か、どっちかだと思います。それは、木が手術日だったからよく覚えているんですよね。

現在は蒸気消毒ですが、あの当時は煮沸消毒でした。そのための火をおこしていると、あの辺にポンポン煙がたつよといふんですよ。そうするうちに、多分正午前後この辺の空襲がはじまつたんです。

変だようというのですぐ火を消しました。那朝空襲の飛行機がそのままこちらへ来たんです。そのとき、十・十空襲のときには建物は全部破壊された訳ではありませんでした。少しは残っています。そのときの爆弾には不発が多かったです。みんな爆発していたらもうそこら辺はみんななかつたと思いますよ。夕方、大きな木麻黄の木が倒されたのを見つかり覚えています。しかし残ったものも三月空襲で全部なくなつてしましました。

空襲前には、日本軍からの命令で患者の強制収容がありました。

患者は地方で自分のうちに隠れていた人が多かったので。理由は日本軍の兵舎がなくなつたので民家に入るためということでした。患者がいると不衛生だから患者を早く連れていけということだったようです。軍のトラックで、未明に。こっちから出かけて夜中に車を出したんです。十九年の九月のことです。

支那事変の当初は、当山全保さん夫婦が職員としておられました

た五十幾つかの、このあいだの新聞にのつていた。あのときの助かつた人で、ああ御元氣なんだねとつてもなつかしく思いました。はじめは入院者は二百五十名定員でしたが、すぐに三百人になりました。いっぱい、急にふえたので二百五十人分の予算を三百人で分けたんです。それでも帰される人があつてお氣の毒でした。食事も二百五十人分を三百人で分けたりですね。門まで来るけれども予算がないからといって帰されるんですよ。ここでどんな思いをしてきたかですね。家族と一緒につらい思いをしてやつとたどりついたのに帰されるのはほんとに気の毒でした。今ならいくらでも入れられるんですけどね。

医療品。とても不自由で、医療品なんかよく再生しましたし、消毒薬などとても制限されたんです。ショウコウ水なんかは濾過して、一週間も十日も使いました。無論ほうじ茶材料がないので、ベー用の反物を買い占めてほうじ茶に使いました。柄物をさいてほうじ茶や当ガーゼに使いました。食べ物も制限されて患者さんにソーメン、うどんばかり三食食べさせた事がありました。あれは支那事変の終りのほうでしたが、それで患者さんたちがストラップを起こしたことがあった位です。それから米を節約するためによく畳掘りにいきました。沖縄では黒糖が比較的手に入りやすいので、何か加工してもやりやすうございました。それでもひどく食糧に困ったことは覚えていませんねえ。ソーメンですから一人何束といつて配給でした。そのへんのことは名護の儀師さんがよく覚えておられると思います。お米を買いに伊平屋、伊是名までいかれたことがあるようです。舟はアンマで。十・十空襲の前でした

た。一棟職員住宅でございます。二棟には患者が四、五十名で一棟は男子です。

当山さん御夫婦は十二年当初から職員として赴任しておられました（MTL相談所）。十九年の前に金武喜瀬武原の官有林開墾のために辞職され、あっちへいかれたんです。当山さんは戦後ハワイから引揚げて愛樂園へこられました。奥さんは十六年か十七年に金武にいて、戦争前にこちらへ引き揚げて来て、十・十空襲までこっちの園に勤務して、戦争で御主人は防衛隊にとられて、夫人はこの官舎に残されておられたのです。

わたしが十三年に赴任した当時は、支那事変がはじまって一年がすぎてい、わたしは那朝で千人針を貢きながら、こちらへ来ました。そのときわたしは十八、九だったんですが二十五にみられました。そのときわたしは十八、九だったんですが二十五にみられました。そして、どうしても二十五負けといわれたのをよく覚えています。寅の戸でしようといわれたんです。その頃は屋我地も今のように橋がなかつたのですから渡し舟でした。わたしたち職員は戦争のために花を作つてそれを売つて司令部に献金して、表彰されて喜んでいました。それは女医さん、婦長さん、看護婦もみんなでしました。全部が戦争態勢に向っていました。ですから、家に事情があるものは帰つてもいいよといわれたんですが、誰も帰りませんでした。患者さんと一緒にだといつて、わたしも軍の司令部から外地へいかないかというすすめを受けましたが、とうとういきませんでした。

そのころは退院する人はありませんでしたね。戦前第一号の退院者はありました。その人は今年渡名喜村でくり舟で行方不明になつたよといつて真珠湾攻撃を聞きました。患者の中では、増産にはげむという形で対応していました。患者さんの青年たちを中心として、戦争といつても特別に感激もなく負いもなかつたように覚えてあります。その当時看護婦は四、五人ですから。戦地の看護婦との交流はありませんでした。

当時婦長さん、西崎さん、松田さん、私と比嘉さん、川平さん、我喜屋さん、小橋川さん、宿舎は二人部屋が三部屋でした。  
看護体制は直通制で、今のよる夜勤はないんです。日勤して当直という状態でした。夜は仮眠。異状はしばしばありましたが、それは当直看護婦の分担でございました。  
戦争中、竹槍訓練なんかはなかったんですが、防空頭巾やモンペ作りはやりました。あれは誰でしたか職員の指導で、患者もやりました。でもたいてい婦人雑誌などをみて自分の着物をといて作ったんです。服装は硫装と和装でした。頭は多くはカンブリで東髪、パームネットは殆んどなかつたようです。パームをかけるとですね、「パームネットに火がついた」といつてみんながきらつておりますから。  
わたしたちが民家へ下宿したのは十・十空襲で官舎がなくなつてからでした。でも民家のことはほとんど覚えていませんです。アブシバレーなどありました。わたしは十三年に来てモーイ豆腐は

はじめてこちらで食べました。そのとき虫が下ったのを思い出しました。その当時部落と國との往来はありませんでした。鬼モチは戦争中廃止されました。ゼイタクといわれて。餅米がなくなつたということもあります。でも済井出では本来あまり作らなかつたのでしょうか。戦争が近くなると愛樂園の行事では開闢記念日、運動会がなくなつた。入闘者の中で消防団、青年団が盛んになつていました。大政翼賛会や青年団があつて、それは各部門にわかれおりました。防空壕作りはリレー式で進められました。

壕生活は横穴でされましたが、飛行機が一時とだえてから翌日の一日分の食事を外で準備しました。それは各自が炊事をしたんですね。二、三人でグループで作っている人もいました。道具はナベ、空カンのようなものが使われました。

こつちでも個人で炊事をしたのは壕生活のときだけで、空襲前は各区分位で、大きな鍋で共同炊事でした。そしておにぎりを作りました。空襲がはげしくなつてからはそれも出来なくなりましたが、炊事は特に炊事婦はいないで、元気な者がやつたんです。横穴式の一つの壕に各区毎にかたまつていたんですが食事は個人個人でした。副食はどうしていたんですかね。昼間は空襲ですし夜はモグリ程度で魚とついていたんじゃないでしょうか。そのほか自分の時えたミソなど使つているものもありました。でも壕生活はわりあいに短かかつたんですね。元気な者は爆風で破壊された木切れなんかで小屋を作りましたが、出来ない者は何時までも壕にいました。それは三月の空襲の後です。

十・十の時は建物が残つてるので特別に不自由ではありません

帰されたんですが弟はそのまま残されました。英語を覚えたかったからですが、そのことで知念は物欲しさに弟をアメリカに残して愛樂園の秘密を全部バラしたといって、隨分攻撃を受けたことがございました。職員からも攻撃を受けたんです。そのころ井上譲義錄をもつていて、弟はそれをもつて米軍から英語を習うといふので私は許したんですが、しかし周囲から変なこといわれるよといつたんです。なんでもないよネーネーいこうといつちやつたんだけど、そういうことがありました。それから、弟がですね、十・空襲が終つてこつちへたよつて来て、食べ物がないんですね、うちちは寄宿舎の人達は食堂でわたしたちのいわゆる貯蔵食を取つておくんです。だけど家族の分はないわけです。で、わたしは寄宿舎を一べん出ました。それで民家へ行つたんですけどね、わたしの所は何にもないわけです。そこに家族が来ましたでしょう。弟がですね。カエル取りにいくんです。いれものが何もないから自分の靴下脱いでそれ持つてカエルをそれに入れるんですよ。で、コツがあるらしいんですよ。パチツと竹でたたくんですつて。自分がさがつておいていくとカエルが飛びから、で、とてもうまく取つたんですね。それで持つて来て頭出して足だけ油でつておかずにしていたんですけどね。それを山で取つていたらですね、スペイが逃げたといって。うちの弟がスペイだといつてつかまれちゃつて。どうも屋我地で見たことがないということで、確かにこれはスペイだといつて。屋我地のスペイが逃げたって話があつたんです。わたしはそれを知らないもんですからね。弟は、きょうのおかずはもう何もないから、暇なんだからカエル取りにいつちやつたわけですよ。わ

でした。全面的に壕生活がはじまつたのは三月空襲の後です。それから間もなく米軍からの餉詰が配給されるようになりました。屋我地島には日本軍はいませんでしたが、連合軍の日本軍で渡辺部隊ですね、あそとの関係はありました。屋我地村の人たちが渡辺部隊の陣地構築に勤務されて知り合いになつて、日本軍はまたそれら日本軍からの圧力や被害はまったくありませんでした。米軍からはヒドイ空襲を受けましたが、園内での米兵による被害はありませんでした。上陸以後は園内に米軍は自由に入つていました。ある日看護婦が風呂場で洗濯をしていると、米兵が窓からのぞいたので、ハッとして両手の指を曲げて前に出してみせたところ何でもなかつたそうです。それですぐ傍に知らせに壕に走り込んだんですが、「何でもない何でもない」と呼びかけていたそうです。園内にはしおつちゅうウロウロしていましたが、別に悪いことはしなかつたですね。そしてここが病院と判つてからは、もう空砲を撃つて通り過ぎるようになりました。園長が捕りよになつて連行されたのは誰かが米軍に通報したからだといわれています。

三月以後に米を日本軍に融通したことが米軍に判つて、儀部事務長、早田園長が連行されたことがあります。でも日本軍からのスパイ嫌疑とか、何とかそんなことはありませんでした。

一度、弟が武部隊にお米をやつたといつて、愛樂園の職員は男子が全部米軍に連行されたことがあります。そのとき他の人はすぐに

たしは全然知りませんからね。その弟が引っぱられていつて、屋我の渡し場までいつて、その日本軍に引っぱられていつてその辺の山から、そして屋我の渡し場までいつたなら、福一郎さん(けいじの兄さん)あの方がですね、師範学校で在学中、ろく膜で、部落の方ですけれど、ここにいつも注射に来ていましたですよ。しょっちゅう注射していましたからね。お話をわかるんですよ。どうしてなんか、何かのきっかけで弟を見たんでしょう、福一郎さんがね、渡し場でパッタリ会つたんですつて。で、いわゆる防衛隊ですか、日本軍じゃなくて郷土防衛隊、護郷隊までいかない、警防組みたいなものが。これ屋我地の子じゃないから、これスペイだから引っぱつていくんだと。これはスペイじゃない愛樂園の知念の弟だと引き取つて来たんですよ。そのままいたらもう銃殺してされる。そうしながら又、アメリカが上陸してきましたでしよう。それで愛樂園の秘密を全部弟がバラしてアメリカーとくつついて。知念は物もらつて喜んでいるといわれた。そういう経験がありました。だから弟は死にものぐるいだった筈ですよ。日本兵がつかまえて連れて行つたんですが、日本兵じゃない屋我地の警防組みたいな人でした。屋我地のどこかにスペイが逃げた逃げたという通報がくるんでございましょうね。みんな目とがらせていたら、丁度みたこともない男の子がそろして歩くものだからスペイだとつかまっちゃつて、福一郎さんが見なかつたら。わたしも丁度勤務にいつていますからね知らないんですよ。あのときジニニアは卒業していましたね。青年学校でいたんですね。十六歳ぐらいになりますかね。それで那覇から空襲で追われて来るときもですね、歩き歩きしてあつちこつち泊つたりし

てやつと名護まで着いたんですって。

壕生活は一般みたいに長くありませんでした。壕生活になるとアメリカさんからいろいろなのが来ました。パーク・ソーセイジもです。

ね。それからなんですか、山羊じゃなく、マトンなどわりと来ました。愛楽園は早く来たんです。実際に配給制度がきびしくなったのは、十・空襲前と思われますけどね。その時のお米が足りなくなつて結局これだけの患者さんかかえているのにお米がないといつてですね、軍にはあるけど軍は出さないんですよ。日本軍の食糧でそれを早田園長とそれから儀部さんが交渉にいつて真喜屋から園までお米を持って来たんですね、伊是名、伊平屋からお米持って来たりしたこともあるんですよ。

それからですね、うちの方で、飛行機が墜落した連天原の方に遺骨集めになんかもいつています。日本軍の飛行機が墜落したんですね。三月空襲後だったと思われます。十月空襲に入る前か、いやアメリカさんがきびしくなつてから、三月空襲後だと思うんです。

その頃、園の人数は九百名と千名近くいたんです。十・空襲前、いわゆる軍収容で、その中に婦人方は三分の一くらいでした。そうしてそういう婦人方はたとえば婦人会をつくるとか、病棟のトンの修理とかですね。それは多分、国防婦人会でしようね、はい。防空訓練、いわゆる防火訓練、繩の火印きとか、あればやつたと思いますよ。官舎側あつちこつち、火事だといって走つて、爆弾投下といえばリレー式にね、水かけて、しょうい弾とか敵機米襲とか、砂をこうスコップでかけたんです。それやつたんです。大東

が「姉ねえ」というから「はいなんね、たけし」といつたら「あんた朝御飯食べんかつたろう。いも持つて来たよ」とぼつと諂おとすんですよ。諂を植えてあつたんですよ屋我地は。諂はわりとあつたもんね。そして屋我地にシオタキがあつたんですよ。マエガキに。それで、味噌を造るのに困らなかつたんですよ。そういう洞窟のまわりで塩たきをしました。患者さんが、戦後です。砂をほして一種の塩田です。それであの、避難民、羽地からの避難民、お塩がなあいんですよ、それで自分達の持つてるものを上げてお塩と替えるんですよ。その点わたしは屋我地におりましたからお塩には全然困らなかつたですよ。でお諂とお塩は困らないもんねえ。そしてお味噌は造れるし、そしてあの、よくお塩を持って商店にいつてですね、お家作つたという人がありますよ。屋我地の人はですね。その塩を羽地へ持つていくわけです。で舟で渡つてですね、そして物々交換でお家たてて商売していたわけ。塩田がさかんだつたんでござりますよね。

戦争中でしたら、かたまた社会や組織がありますと朝の行事がありますよね。宮城遙拝とか国旗掲揚とか、やっていました。でも空襲後は出来ないんですね。

十・空襲前後でしかなかつたと思われますよ。国旗掲揚なんかもちろんとあつたんですもん。始まりは、昭和十三年でござります。あのときは、ずっとラジオ体操して国旗掲揚も、毎朝、患者さんも動ける人は来るんですよね。でわたしたちも看護婦達も朝、君が代は歌いますが、君が代歌うのはあれでござりますよ行事のとき、

亞戦争に入つてからだつたと思います。日支事変中はやつていなかつたと思います。

あのね、愛樂園の会長がいますでしょう。今のが会長さんですね。

愛樂園全体を治める会長、自治会長がいてですね。警防団がある中の警防団長がいるわけですよ。もちろんのまあ、兵隊とか中尉とか大尉はいませんけどね、ちょっととした普通の軍曹とか、軍曹までもいつていなかつた比嘉カシンさんなんか、そういう人は、警防団長なつたりしていました。下士官あがりの人。婦人の防火訓練はわたしたちも一緒になつてやつたと思われますけどね。医局と一緒に行つて、で、わたしたちはあの防火訓練の日だったと思いま

よ。ええと、火事、しょういだんが落ちたとか火事だといつたんだかね。担架持つて走つて、そこに患者さんひとり名札つけて、うずくまらして置くんですよ。それでこの人がケガ人だと、そこで、担架に乗せていく。あれは待避訓練ですね。で、あの敵機来襲の時ですね、そこのちょっとした山があるんですが、そこへ職員がのぼつていて、そこに避難してますからね、あのころはもう名護配電から電気がついてきよつたんですよ。で、時々朝早くもうサインレンが鳴つて、敵機来襲といつて電気が消えるんです。で、わたしは部落からここまで走つてくるわけですね。そしてあの国防色の頭巾、帽子みな準備したり、それに着替えて、ここに避難している患者さんのそばに避難していると。で、わたしが朝早く走つて来ていますからね朝御飯食べていないんです。で、弟がそこであの見張りしているんですよ。敵機来襲を職員に連絡して、弟たらしくうござります。

十・空襲の日もそうでした。朝の朝礼があつて日の丸は掲げて普段も歌つたみたいです。ラジオ体操しながらその前に、君が代歌つてからラジオ体操だったと思われますけどね。ずっとそれは続いたのですが、塩沼園長がお好きなんですね。

十・空襲の日もそうでした。朝の朝礼があつて日の丸は掲げてあつた。その屋頂空襲があつて掲揚台はなかつたのではないか、掲揚台はセメン固めしか残つていませんけど、なぜかというとですね運天港に、魚雷艇がありますよね。で、こつちにきれいな兵舎みたいなのが並んでいますよ。秘密工場とまちがえられた。ここでまとまって、こんなへんびな所にきれいな瓦が並んでいますからね、兵舎が。それを秘密工場と間違えられて、爆弾が落されたわけですね。そのとき掲揚台は飛んだのか、その土台は残つてしまつた。そしてですね、前の納骨堂。今の納骨堂は新しくなりましたけど、前の納骨堂の作り方がですね、南方の陣地の高射砲とおんなじような作り方だつたんでござりますね。そんことで日つけられていたらしくうござります。

十・空襲後は屋根に白十字をつけるということは、やらなかつた。それで三月空襲後アメリカさんが上陸して来て、なんであつた方、病院であつたらそういう旗あげんかったといつてね。それがかけても駄目だと思ってかかげんかったといつたんですよ。それから三月空襲以後ですよ、あつち、納骨堂前に十字のマークがあるの。それからじゃこつちはもう空襲しないのにー。その間、那覇、南部はまだ空襲中ですよ。

支那事変以後ずっとここには病院の標識はありませんでした。標識したつてアメリカさんがそんなの信用する筈がない。みんな鬼畜

米英だと思っていた。

わたしたちは艦砲射撃があつてその翌日アメリカさんが上陸して、それがわたしたちの敗戦でした。だけどその時に青年達が出て行つて自分達は、手榴弾持つているから、投げようといつて、かまえていたそうです。そのアメリカさんに向つて。その青年達がですねどこで手榴弾拾つて来たか。

わたしは持つていないです。で、看護婦達の場合それがないもんですから、もし上陸したらどうする。捕りよになる場合どうするつていつたらね、メスで心臓破つても死なれんし、あのタピナールつて薬漿があつたんですよ、あれ注射しようかというふうに話はしていたんですよ。捕りよになるというのが一番恐かつたですから。

## 愛樂園

愛樂園事務長（當時）儀部朝一（三六歳）

食糧が逼迫しましたねえ、全然配給がないんです。配給といっても保管米がないわけですね。これは戦争後の二、三か年位です。

戦争前に早田園長と泉正重庶務課長とわたしと三名で那覇の軍司令部に食糧のこと出たんです。ところが当時の食糧營団とか道路公團とかいうのは戦争でやられてからに、みな理事長、団長（食糧營団）は日本に、新里専務は台湾に何かの問題で出張されて、誰にも会えないで、それでどうするかということ、政府は遠すぎるし知事はまだおられん、もうどこにもあの頃事務所がないんです。

県庁はもう十・十空襲でやられましたからね。やられて行き場所がないんです。その頃庶務課において、食糧のほうはわたしがやっておったのです。食糧担当ということですが仕事も殆んどわたしのほうでやつていました。

愛樂園の職員になったのは開戦後じきで、十・十空襲のときは既に職員。昭和十六年開戦のときは転記ですがしかし仕事、政府のほうに当るのはみなわたしでした。そこで、あのときまでも、療養所というと非常に、一般から偏見を受けて屋我地の療養所から来たというたら、組合——統制經濟などいろいろな物資の組合があるわけです——が撤退するくらいだった。それで療養所の立場を細かく説明して、お互いのためにあれは隔離されておるんだし、隔離されることを彼らは希望しておるんじゃない、何の罪もないし何とか考えてやらなければいけない問題じゃないかというふうなことまで話してようやく説得し、そうするとその間にみなまた聞きたがるんですね。説得が効果があつたら特別な扱い——同情ですね、しまいには非常にうまくいったんですがね。そこであらゆる業者の組合——醤油、味噌、衣料品等一政府関係の人々にも話してわかつてもらいましたが、ほんとうは物資があつて予算もとられてはじめて安心な隔離ができるんであって、わたしがどんなにジタバタしたって隔離できまいんだ、そこだけは満足にしてくれなければという話もしたる、成程と判つてもらって、それまではよかつたんですが、とうとう戦争が激化して爆弾でやられるし、それで愛樂園なんかは十・十空襲になつたらもう食糧はどうするかという問題になつて、早田園長とわたしと泉正重さんと三名で那覇へ行つたら、えらい人なんか

みんな会えないで、軍の首里の参謀本部へいきましたが、もうあれから食糧はないという、日本軍の話ですね。まだ上陸はしないんだから、庶務課長の泉さんと、わたしたちみんなバラバラになつてしまつたんですけど、わたしは少し待ちましよう。それで食糧營団、今の那覇高校、戦前の二中、あの近くの壕に事務所があつて。ああ儀部さん来たのかと友だちから呼ばれて、何しに来たんですか、実は食糧のこと來たんだがうまくいかないで困つているんだ、いや食糧のことなら心配いらないから酒のみなさいという、酒のむなら話をしよう、わたしあのころまで飲みよつたもんだから。飲むならうまいくが、飲まなければどんなジタバタしても、どんなえらい人があつても出来ませんと。そんな馬鹿な話があるかといつて、冗談しながら、あなたが出すなら飲もうじゃないかといつて、飲みはしないが、相手になつて話し合つたんですよ。飲んで交わつて話し合いで考え方というが、どうしてそれが食糧を与えることになるのか、知事も政府も出来ないことを。それは誰がも出来ないことであるんだが、そこにある山入端君という食糧の保管主任がおる、食糧課の移動係の一筆でもって、その食糧の保管指令を出す、これは団長でも誰でも出来ない、あの人だけだと。あんたに配給はできないんだが、儀部朝一個人に何百袋一どのくらいほしいかというから二百袋位というと、それだけしかほしくないのか、それ一ヶ月分しかないよ、それじゃ二ヶ月分位、五百袋ほしいんだということで、五百袋保管指令をわたしに出したんですよ、百斤俵の二百袋ですよね。これを預つておれば、毎月配給されておる分を二百五十袋位とちょっと使えばいいんじゃないかと。なるほど、

うまいことだなと思つて、それでわたしも非常にうれしくなりまして、話しあわして、それで指令書を出せと。翌日は、それを那覇から取ろうとしてたら、丁度名護に米はあるんですね、出そうとしたら、屋我地に運搬することができないんですね、船はどうするか、船は、借ろうとしたら、自分が専用に使っておつた運天港がやられたんですね。戦争が激しいもんだから、どうすることもできない。それで県庁の保安部の輸送課というのがあつたんですが、その熊崎トシオという人の所に行つて、こういうようなことなんだがね、今度だけはわたしの一生のお願いだから聞いてもらいたいとお願いしたら、君、今ごろ船借ろうというのは難しい問題だ、これはわたしらの力でもちよつとできない。何かの方法をつけてできるんでは、わたしの個人の利益でもないしね、あの療養所の大きな問題があるし、患者が丁度九百名位いて、これが食糧あつての収容であつて、隔離はしなければならない、食糧がなければならない、食糧がなければ、これがバラバラになつた場合には、もう作戦としての患者の収容といいうものは、わたし個人のことではないのだ、ひとつ沖縄作戦の一環としてこれは考へる、食糧は入院者の必要量だけは確保してもらいたい、あなたも考えてくれと。ちょっとと考えて、それじゃ八重山丸といて、丁度エンジンを修理したのがあるから、試運転の名目で那覇から名護に回航しよう。これ始めたなと思つて、いいんだといって、それじゃ明日やろうと。そこで當團に馬車二十五台出したんですけどね、馬車が港にきて桟橋につけようとするんだが、船へ積めないんですよ、上からボンボンきてね、十・十空襲の後ですね、その年のうちの冬です。それじゃほか